Faculty Development

椙山女学園大学・大学院ＦＤ活動報告書
（平成30年度）

椙山女学園大学・大学院
ファカルティ・ディベロップメント

第6号（通巻 第19号）

平成30年度

梅山女学園大学・大学院FD活動報告書

梅山女学園大学・大学院
ファカルティ・ディベロップメント

第６号（通巻第19号）

椙山女学園大学・大学院 ＦＤ 活動報告書（平成30年度）

目　次

1　はじめに　　全学FD委員会委員長・大学院FD委員会委員長　田中　節雄

2　全学FD活動報告
2－1．全学FD委員会活動記録 …… 2
2－2．授業アンケート …… 4
2－3．各種研修等 …… 13

3　学部FD活動報告
3－1．生活科学部 …… 16
3－2．国際コミュニケーション学部 …… 20
3－3．人間関係学部 …… 26
3－4．文化情報学部 …… 28
3－5．現代マネジメント学部 …… 29
3－6．教育学部 …… 33
3－7．看護学部 …… 35

4　大学院FD活動報告
4－1．大学院ＦＤ委員会活動記録 …… 39
4－2．大学院授業アンケート …… 40

5　研究科FD活動報告
5－1．生活科学研究科 …… 47
5－2．人間関係学研究科 …… 49
5－3．現代マネジメント研究科 …… 52
5－4．教育学研究科 …… 53

6　FD委員会名簿

1　はじめに

はじめに

椙山女学園大学全学FD委員会委員長
椙山女学園大学大学院FD委員会委員長
田　中　節　雄

椙山女学園大学および椙山女学園大学大学院が2018年度に実施したFD活動の報告書がまとまった。

2018年度のFD活動は、全体としては2017年度の活動方針を踏襲しており、学部に関しては、全学的に共通で行う活動と学部ごとに行う活動の二本立てとし、また大学院に関しても同じように、４研究科共通の活動と各研究科独自の活動の二本立てとした。

全学部共通のFD活動の中心は授業アンケートの実施である。前期は537科目、後期は575科目を対象にアンケートを実施した。ほぼ全教員が参加し、授業を受ける側の学生の受け止め方が教員個人に把握され、また学部としてもあるいは大学全体としてもその情報が共有されるようになっている。その点で授業アンケートは大いに成果を上げていると言えるが、問題もある。授業アンケートによって把握された授業に対する学生の受け止め方を踏まえた、授業の改善のための活動が個々の教員に委ねられており、必ずしも学部としてあるいは大学として組織的に対応できているとは言えないのが実状である。授業アンケートの結果を踏まえた授業改善の組織的な取り組みが今後の課題である。

全教員が参加するＦＤ研修会を2018年度も実施した。９月の後期が始まる直前の午前と午後の２回に分けて、教員はいずれかの会に参加することになっている。従来は外部から講師を招いて授業の改善に資するような内容の講演をお願いしていたが、今年度は本学の教員に自らの授業について話してもらった。講師は過去においてベストティーチャー賞を受賞した４名の教員であった。「学生を惹きつける授業」をテーマに、それぞれの教員が工夫していることなどを語ってもらった。研修会は好評だったので、来年も引き続いてこの方式で実施することを考えている。

他のFD活動としては、新任教員の研修が各学部単位で行われたが、学外の研修プログラムへの参加者はなく、再検討が必要と思われる。また教員の自己点検アンケート（教育研究の振り返り）は例年と同じく実施した。

大学院FD活動の中心は院生対象のアンケート調査であったが、学部と異なって、個々の科目に関する質問ではなく、それぞれの研究科の授業全体に対して意見を求める質問と、施設設備など学生の勉学環境について意見や要望を聞く質問から成るアンケートであった。アンケート回収後は、例年と同じく、それぞれの研究科でその回答をもとに対応について協議が行われた。

本学は毎年着実にFD活動を実施してきており、それなりの成果を上げていると思われる。しかし、学生の声を聴き、より良い授業を求めた研修活動も行った後、それらを踏まえた授業の改善がどこまで実を結んでいるかを振り返ってみると、必ずしも十分なものと自信を持って言うことは難しい。全学ＦＤ委員会としては、本学のFD活動がより実質的に実りあるFD活動となるように、今後も、ＦＤのあり方自体を常に自己点検しながら、活動に取り組んでいきたいと考えている。

2　全学FD活動報告

２－１．全学FD委員会活動記録
２－２．授業アンケート
２－３．各種研修等

2－1　全学FD委員会活動記録

（第 1 回） 平成30年 4 月24日（火） 15:30～16:40	1. 報告 （1）平成29年度大学・大学院FD活動報告書の構成紹介 （2）平成29年度後期授業アンケート結果について （3）その他 2. 議題 （1）平成30年度FD活動に関する件 ・基本的方針 ・授業アンケート ・「今年度の振り返り」「来年度の目標」アンケート ・新任教員研修 ・FD研修会 ・授業参観 ・学生の学修時間確保・検証 （2）平成30年度全学FD委員会の進め方に関する件 （3）平成30年度学生FDスタッフ申請に関する件 （4）その他
（第 2 回） 平成30年 5 月22日（火） 15:30～16:20	1. 報告 （1）新任教員研修（学外）について （2）平成30年度授業アンケート実施要領（案）、実施希望科目について （3）平成29年度「今年度の振り返り」「来年度の目標」アンケートについて （4）その他 2. 議題 （1）平成30年度学生FDスタッフ申請に関する件 （2）FD研修会開催日程に関する件 （3）平成31年度授業アンケートに関する件ほか ・平成31年度の授業アンケートについて ・FD研修会について ・授業参観について ・学生の学修時間確保・検証について （4）その他
（第 3 回） 平成30年 6 月26日（火） 15:30～16:15	1. 報告 （1）学部でのFD活動について （2）その他 2. 議題 （1）平成30年度FD研修会に関する件 （2）平成30年度ICTを活用した教育内容改善のための研修会に関する件 （3）平成31年度授業アンケートに関する件 （4）授業参観に関する件 （5）学生の学修時間確保・検証に関する件 （6）その他
（第 4 回） 平成30年 7 月24日（火） 15:30～16:10	1. 報告 （1）学部でのFD活動について （2）その他 2. 議題 （1）平成30年度授業アンケート　リフレクションペーパーに関する件 （2）平成30年度後期学生FDスタッフ申請に関する件 （3）平成30年度FD活動予算に関する件 （4）平成31年度授業アンケートに関する件 （5）授業参観に関する件 （6）学生の学修時間確保・検証に関する件 （7）その他

（第 5 回） 平成30年 9 月 6 日（木） ～ 9 月12日（水） ※持ち回り	**1. 議題** （1）平成30年度後期学生FDスタッフ申請に関する件
（第 6 回） 平成30年 9 月25日（火） 15:30～16:40	**1. 報告** （1）平成30年度FD研修会実施状況について （2）平成30年度前期授業アンケート実施状況について （3）前期学生FDスタッフ成果報告書について （4）その他 **2. 議題** （1）平成30年度後期授業アンケートスケジュール・実施要領に関する件 （2）平成31年度授業アンケートに関する件 （3）学生の学修時間確保・検証に関する件 （4）平成31年度全学FD委員会予算に関する件 （5）その他
（第 7 回） 平成30年10月23日（火） 15:30～16:30	**1. 報告** なし **2. 議題** （1）学生の学修時間確保・検証に関する件 （2）平成31年度シラバスに関する件 （3）その他
（第 8 回） 平成30年11月27日（火） 15:30～16:00	**1. 報告** （1）平成31年度シラバスについて （2）その他 **2. 議題** （1）平成30年度後期授業アンケートリフレクションに関する件 （2）「今年度の振り返りと来年度の目標に関するアンケート」に関する件 （3）その他
（第 9 回） 平成31年 1 月22日（火） 15:30～16:05	**1. 報告** （1）2018年度全学FD委員会予算執行状況について （2）2019年度新任教員研修プログラムについて （3）その他 **2. 議題** （1）2018年度FD活動報告書に関する件 （2）2019年度学生FDスタッフの募集に関する件 （3）その他2018年度のFD活動の検証と2019年度の計画に関する件 （4）その他

2－2　授業アンケート

【前期】

1．実施概要

・実施期間：平成30年７月17日（火）～７月23日（月）
　　平成30年７月２日（月）～７月16日（月）（予備期間）

・実施対象科目：平成30年度前期開講の授業科目のうち、卒業研究及び受講者数が10名未満の科目を除く全ての授業科目から、できるだけ受講者の多い科目を２科目以上選択

2．実施科目数及び実施率

学　部	対象科目数	実施科目数	実施率	未実施科目数
生活科学部	96	94	97.9%	2
国際コミュニケーション学部	115	112	97.4%	3
人間関係学部	87	85	97.7%	2
文化情報学部	81	80	98.8%	1
現代マネジメント学部	63	60	95.2%	3
教育学部	61	58	95.1%	3
看護学部	48	48	100.0%	0
計	551	537	97.5%	14

※参考：平成29年度前期授業アンケート実施率　94.３％（563／597科目）
※授業がアンケート実施前に終了する科目、担当者が交代した科目等は、対象科目から外した。

3．総合的充実度（設問12）回答

「設問12　総合的にみてこの授業は充実していた。」

学　部	その通りである	どちらかといえばその通りである	どちらかといえばそうではない	そうではない
生活科学部	45.7%	43.9%	6.5%	1.0%
国際コミュニケーション学部	54.2%	36.6%	4.9%	0.6%
人間関係学部	49.5%	40.5%	6.7%	1.2%
文化情報学部	41.2%	45.7%	8.7%	2.3%
現代マネジメント学部	44.8%	41.6%	7.7%	2.9%
教育学部	60.4%	33.4%	3.6%	0.6%
看護学部	52.0%	38.8%	5.1%	1.2%
大学全体	52.6%	37.9%	5.5%	1.2%

4．リフレクション・ペーパーの提出状況

●学部別提出率

学　　部	アンケート 実施科目数	リフレクション･ペーパー 提出科目数	リフレクション･ペーパー 提出率
生　活　科　学　部	94	85	90.4%
国際コミュニケーション学部	112	95	84.8%
人　間　関　係　学　部	85	60	70.6%
文　化　情　報　学　部	80	68	85.0%
現代マネジメント学部	60	45	75.0%
教　育　学　部	58	55	94.8%
看　護　学　部	48	45	93.8%
全　学　部 （昨年度前期実績）	537 （563）	453 （440）	84.4% （78.2%）

9 月20日（木）集計結果及びリフレクションの学内開示（S*mapのキャビネット）

【後期】

1．実施概要

・実施期間：平成31年 1 月 7 日（月）～1 月21日（月）
　　平成30年12月18日（火）～12月24日（月）（予備期間）

・実施対象科目：平成30年度後期開講の授業科目のうち、卒業研究及び受講者数が10名未満の科目を除く全ての授業科目から、2 科目以上選択。

2．実施科目数及び実施率

学　　部	対　象 科目数	実　施 科目数	実施率	未実施 科目数
生　活　科　学　部	104	101	97.1%	3
国際コミュニケーション学部	116	113	97.4%	3
人　間　関　係　学　部	109	107	98.2%	2
文　化　情　報　学　部	90	87	96.7%	3
現代マネジメント学部	68	67	98.5%	1
教　育　学　部	66	63	95.5%	3
看　護　学　部	38	37	97.4%	1
計	591	575	97.3%	16

※参考：平成29年度後期授業アンケート実施率　93.8％（549/585科目）

3．総合的充実度（設問12）回答

「設問12　総合的にみてこの授業は充実していた。」

学　部	その通りである	どちらかといえばその通りである	どちらかといえばそうではない	そうではない
生活科学部	46.0%	42.3%	6.2%	1.7%
国際コミュニケーション学部	53.9%	37.3%	5.7%	0.8%
人間関係学部	50.1%	38.1%	6.9%	1.6%
文化情報学部	44.6%	44.4%	6.6%	0.9%
現代マネジメント学部	41.7%	45.9%	8.1%	1.4%
教育学部	63.1%	31.2%	2.3%	0.3%
看護学部	50.1%	40.0%	4.7%	0.8%
大学全体	53.2%	37.0%	5.6%	1.1%

4．リフレクション・ペーパーの提出状況

●学部別提出率

学　部	アンケート実施科目数	リフレクション・ペーパー提出科目数	リフレクション・ペーパー提出率
生活科学部	101	95	94.1%
国際コミュニケーション学部	113	93	82.3%
人間関係学部	107	83	77.6%
文化情報学部	87	74	85.1%
現代マネジメント学部	67	50	74.6%
教育学部	63	60	95.2%
看護学部	37	31	83.8%
全学部 （昨年度前期実績）	575 （549）	486 （410）	84.5% （74.7%）

3月28日（木）集計結果及びリフレクションの学内開示（S*mapのキャビネット）

平成30年度授業アンケート（前期）結果

1．実施の目的
　学生による授業アンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とする。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのＦＤを推進するための資料として活用する。

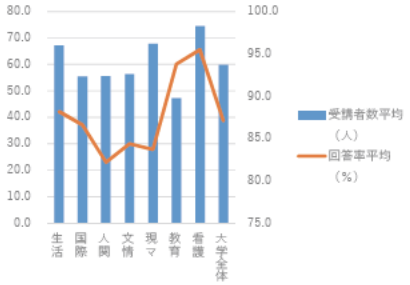
2．実施時期
　実施期間：平成30年7月17日（火）～7月23日（月）
　実施予備期間：平成30年7月3日（火）～7月16日（月）

3．実施方法
　アンケート用紙による

4．実施科目
　大学全体：537科目（教養教育科目106科目、専門教育科目431科目）
　　生活科学部：94科目（教養教育科目12科目、専門教育科目82科目）
　　国際コミュニケーション学部：112科目（教養教育科目26科目、専門教育科目86科目）
　　人間関係学部：85科目（教養教育科目26科目、専門教育科目59科目）
　　文化情報学部：80科目（教養教育科目13科目、専門教育科目67科目）
　　現代マネジメント学部：60科目（教養教育科目17科目、専門教育科目43科目）
　　教育学部：58科目（教養教育科目3科目、専門教育科目55科目）
　　看護学部：48科目（教養教育科目9科目、専門教育科目39科目）

集計・分析結果

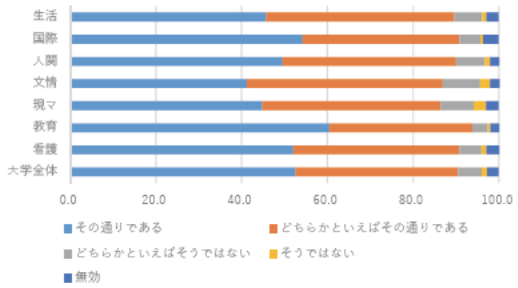
受講者数及び回答率平均（全体）



【全体】	受講者数平均（人）	回答率平均（%）
生活	67.2	88.2
国際	55.5	86.6
人関	55.6	82.2
文情	56.4	84.4
現マ	67.9	83.7
教育	47.4	93.8
看護	74.4	95.5
大学全体	59.9	87.1

受講者数は大学全体で平均59.9人であった。学部別では、看護学部が74.4人で最多、教育学部が47.4人で最少であった。
　回答率平均は大学全体で87.1%、学部別では、看護学部が95.5%で最も高かった。

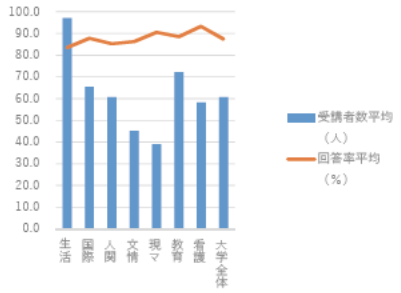
総合充実度（全体）



【全体】	総合充実度平均（%）				
	その通りである	どちらかといえばその通りである	どちらかといえばそうではない	そうではない	無効
生活	45.7	43.9	6.5	1.0	2.8
国際	54.2	36.6	4.9	0.6	3.6
人関	49.5	40.5	6.7	1.2	2.1
文情	41.2	45.7	8.7	2.3	2.2
現マ	44.8	41.6	7.7	2.9	2.9
教育	60.4	33.4	3.6	0.6	2.0
看護	52.0	38.8	5.1	1.2	2.9
大学全体	52.6	37.9	5.5	1.2	2.7

総合充実度を問う「総合的にみて、この授業は充実していた。」という設問に対して、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」との肯定的回答を示した割合は、大学全体で90.5%、学部別では、教育学部が93.8%と最も高かった。

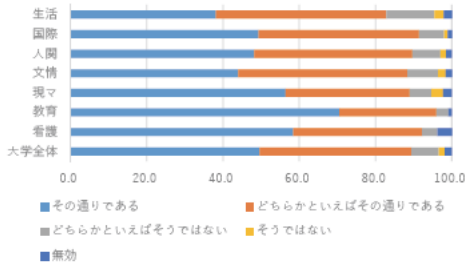
受講者数及び回答率平均（教養）



【教養】	受講者数平均（人）	回答率平均（%）
生活	97.0	83.5
国際	65.5	87.8
人関	60.7	85.3
文情	45.3	86.3
現マ	39.1	90.5
教育	72.3	88.6
看護	58.3	93.3
大学全体	60.7	87.4

教養教育科目の受講者数は大学全体で平均60.7人であった。学部別では、生活科学部が97.0人で最多、文化情報学部が45.3人で最少であった。
教養教育科目の回答率平均は大学全体で87.4%、学部別では、看護学部が93.3%で最も高かった。

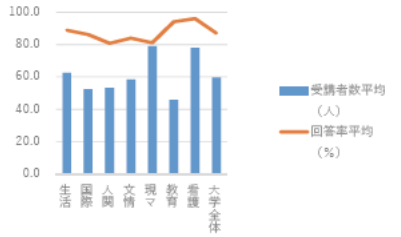
総合充実度（教養）



【教養】	総合充実度平均（%）				
	その通りである	どちらかといえばその通りである	どちらかといえばそうではない	そうではない	無効
生活	38.1	44.7	12.7	2.4	2.2
国際	49.3	42.1	6.6	0.9	1.2
人関	48.2	41.5	7.3	1.5	1.5
文情	44.0	44.4	8.0	2.0	1.7
現マ	56.4	32.6	5.7	3.0	2.3
教育	70.5	25.5	3.1	0.0	0.9
看護	58.5	33.7	4.1	0.0	3.8
大学全体	49.6	39.8	7.2	1.6	1.8

総合充実度を問う「総合的にみて、この授業は充実していた。」という設問に対して、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」との肯定的回答を示した割合は、教養教育科目において、大学全体で89.4%、学部別では、教育学部が96.0%と最も高かった。

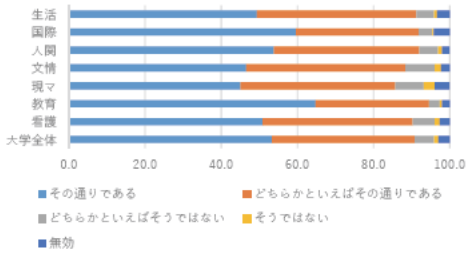
受講者数及び回答率平均（専門）



【専門】	受講者数平均（人）	回答率平均（%）
生活	62.8	88.9
国際	52.6	86.2
人関	53.4	80.8
文情	58.5	84.0
現マ	79.2	81.1
教育	46.1	94.1
看護	78.1	96.1
大学全体	59.7	87.0

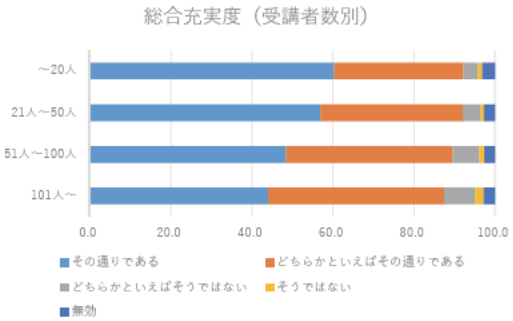
専門教育科目の受講者数は大学全体で平均59.7人であった。学部別では、現代マネジメント学部が79.2人で最多、教育学部が46.1人で最少であった。
専門教育科目の回答率平均は大学全体で87.0%、学部別では、看護学部が96.1%で最も高かった。

総合充実度（専門）



【専門】	総合充実度平均（%）				
	その通りである	どちらかといえばその通りである	どちらかといえばそうではない	そうではない	無効
生活	49.4	41.8	4.7	0.8	3.3
国際	59.6	32.2	3.6	0.4	4.2
人関	53.8	38.2	4.9	1.1	1.9
文情	46.6	41.7	7.7	1.7	2.3
現マ	45.1	40.6	7.5	2.8	3.9
教育	64.8	29.7	2.9	0.6	2.0
看護	50.9	39.4	5.7	1.3	2.7
大学全体	53.3	37.5	5.1	1.1	3.0

総合充実度を問う「総合的にみて、この授業は充実していた。」という設問に対して、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」との肯定的回答を示した割合は、専門教育科目において、大学全体で90.8%、学部別では、教育学部が94.5%と最も高かった。



総合充実度を問う「総合的にみて、この授業は充実していた。」という設問に対して、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」との肯定的回答を示した割合は、受講者別では、20人以下が92.2%で最も高く、101人以上が87.5%で最も低かった。

【全体】受講者数別	総合充実度平均（%）				
	その通りである	どちらかといえばその通りである	どちらかといえばそうではない	そうではない	無効
101人～	44.0	43.5	7.7	2.0	2.8
51人～100人	48.4	41.1	6.6	1.3	2.6
21人～50人	56.9	35.2	4.4	0.8	2.7
～20人	60.3	31.9	3.6	1.1	3.1

2018年度前期授業アンケートは、実施537科目において、受講者数の平均は59.9人、回答率平均は87.1%であった。
総合充実度を問う「総合的にみて、この授業は充実していた。」との設問に対して、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」との肯定的回答は全科目平均で90.5%と高い数値を示した。
この数値は、教養教育科目89.4%、専門教育科目90.8%といずれにおいても高く、受講者別でも20人以下の科目で92.2%、21人～50人の科目で92.1%、51人～100人の科目で89.5%、101人以上の科目で87.5%と概ね高い数値であった。
科目ごとには、各担当教員によるリフレクションを掲載し、学生・教員向けにポータルサイトにおいて掲出している。

平成30年度授業アンケート（後期）結果

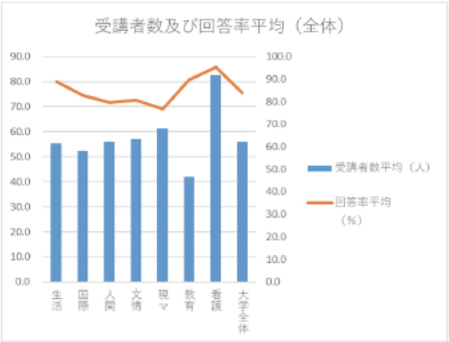
1．実施の目的
　学生による授業アンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とする。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのＦＤを推進するための資料として活用する。

2．実施時期
　実施期間：平成31年1月7日（月）～1月21日（月）
　実施予備期間：平成30年12月18日（火）～12月24日（月）

3．実施方法
　アンケート用紙による

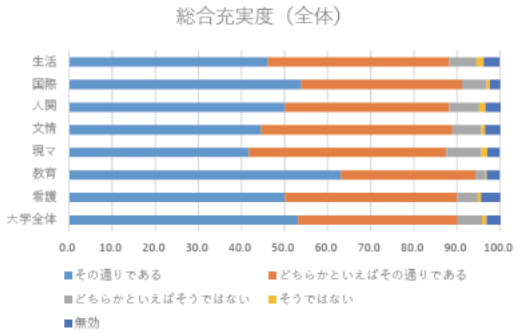
4．実施科目
　大学全体：575科目（教養教育科目105科目、専門教育科目470科目）
　　生活科学部：101科目（教養教育科目13科目、専門教育科目88科目）
　　国際コミュニケーション学部：113科目（教養教育科目20科目、専門教育科目93科目）
　　人間関係学部：107科目（教養教育科目22科目、専門教育科目85科目）
　　文化情報学部：87科目（教養教育科目17科目、専門教育科目70科目）
　　現代マネジメント学部：67科目（教養教育科目18科目、専門教育科目49科目）
　　教育学部：63科目（教養教育科目5科目、専門教育科目58科目）
　　看護学部：37科目（教養教育科目10科目、専門教育科目27科目）

集計・分析結果



【全体】	受講者数平均（人）	回答率平均（%）
生活	55.2	88.9
国際	52.1	82.7
人関	56.0	79.6
文情	56.9	80.7
現マ	61.2	76.6
教育	42.0	89.6
看護	82.6	95.2
大学全体	56.0	83.8

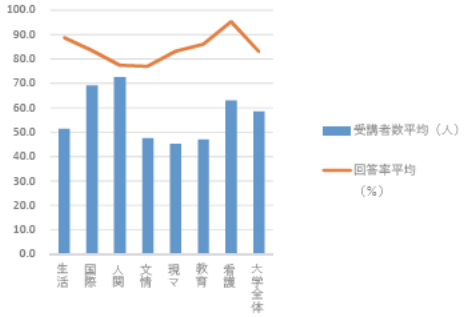
　受講者数は大学全体で平均56.0人であった。学部別では、看護学部が82.6人で最多、教育学部が42.0人で最少であった。
　回答率平均は大学全体で83.8%、学部別では、看護学部が95.2%で最も高かった。



【全体】	総合充実度平均（%）				
	その通りである	どちらかといえばその通りである	どちらかといえばそうではない	そうではない	無効
生活	46.0	42.3	6.2	1.7	3.7
国際	53.9	37.3	5.7	0.8	2.3
人関	50.1	38.1	6.9	1.6	3.4
文情	44.6	44.4	6.6	0.9	3.5
現マ	41.7	45.9	8.1	1.4	2.8
教育	63.1	31.2	2.3	0.3	3.0
看護	50.1	40.0	4.7	0.8	4.4
大学全体	53.2	37.0	5.6	1.1	3.2

　総合充実度を問う「総合的にみて、この授業は充実していた。」という設問に対して、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」との肯定的回答を示した割合は、大学全体で90.2%、学部別では、教育学部が94.3%と最も高かった。

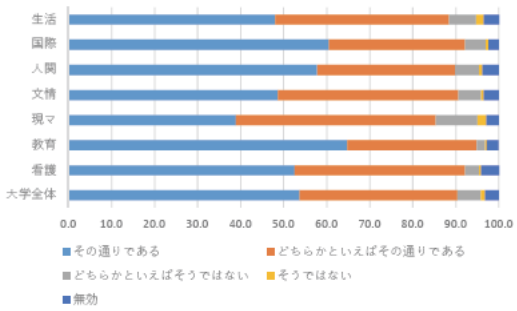
受講者数及び回答率平均（教養）



【教養】	受講者数平均（人）	回答率平均（%）
生活	51.4	88.7
国際	69.2	83.5
人関	72.6	77.4
文情	47.6	77.0
現マ	45.3	83.1
教育	47.0	86.0
看護	63.0	95.3
大学全体	58.5	83.0

教養教育科目の受講者数は大学全体で平均58.5人であった。学部別では、人間関係学部が72.6人で最多、現代マネジメント学部が45.3人で最少であった。
教養教育科目の回答率平均は大学全体で83.0%、学部別では、看護学部が95.3%で最も高かった。

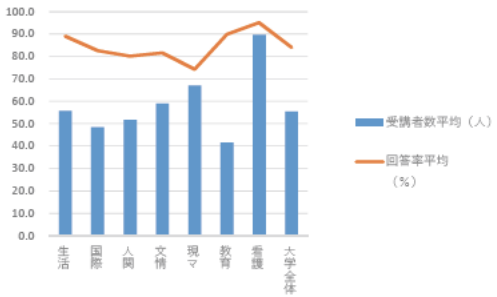
総合充実度（教養）



【教養】	総合充実度平均（%）				
	その通りである	どちらかといえばその通りである	どちらかといえばそうではない	そうではない	無効
生活	48.1	40.3	6.3	1.8	3.6
国際	60.5	31.7	4.8	0.6	2.4
人関	57.8	32.0	5.6	0.8	3.8
文情	48.7	41.9	5.3	0.6	3.5
現マ	38.9	46.4	9.7	2.1	2.9
教育	64.8	30.1	1.9	0.4	2.7
看護	52.6	39.6	3.2	0.5	4.2
大学全体	53.7	36.7	5.4	1.0	3.2

総合充実度を問う「総合的にみて、この授業は充実していた。」という設問に対して、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」との肯定的回答を示した割合は、教養教育科目において、大学全体で90.4%、学部別では、教育学部が94.9%と最も高かった。

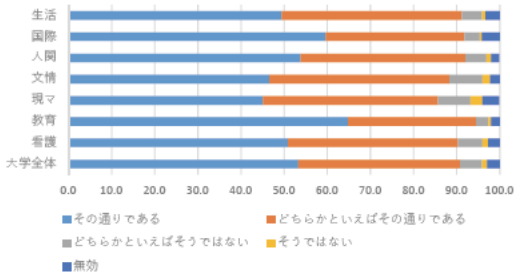
受講者数及び回答率平均（専門）



【専門】	受講者数平均（人）	回答率平均（%）
生活	55.8	89.0
国際	48.5	82.6
人関	51.7	80.2
文情	59.1	81.6
現マ	67.1	74.3
教育	41.6	89.9
看護	89.8	95.1
大学全体	55.5	84.0

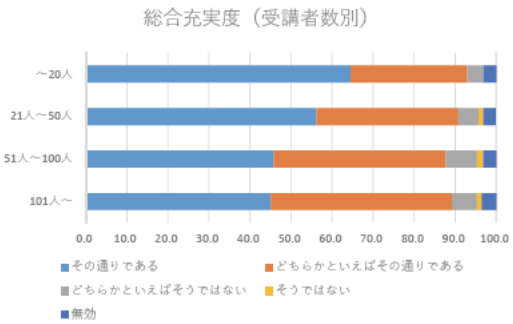
専門教育科目の受講者数は大学全体で平均55.5人であった。学部別では、看護学部が89.8人で最多、教育学部が41.6人で最少であった。
専門教育科目の回答率平均は大学全体で84.0%、学部別では、看護学部が95.1%で最も高かった。

総合充実度（専門）



【教養】	総合充実度平均（%）				
	その通りである	どちらかといえばその通りである	どちらかといえばそうではない	そうではない	無効
生活	48.1	40.3	6.3	1.8	3.6
国際	60.5	31.7	4.8	0.6	2.4
人関	57.8	32.0	5.6	0.8	3.8
文情	48.7	41.9	5.3	0.6	3.5
現マ	38.9	46.4	9.7	2.1	2.9
教育	64.8	30.1	1.9	0.4	2.7
看護	52.6	39.6	3.2	0.5	4.2
大学全体	53.7	36.7	5.4	1.0	3.2

総合充実度を問う「総合的にみて、この授業は充実していた。」という設問に対して、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」との肯定的回答を示した割合は、専門教育科目において、大学全体で90.4%、学部別では、教育学部が94.9%と最も高かった。



総合充実度を問う「総合的にみて、この授業は充実していた。」という設問に対して、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」との肯定的回答を示した割合は、受講者別では、20人以下が93.0%で最も高く、51人～100人が87.7%で最も低かった。

【全体】受講者数別	総合充実度平均（%）				
	その通りである	どちらかといえばその通りである	どちらかといえばそうではない	そうではない	無効
101人～	45.1	44.1	6.1	1.1	3.6
51人～100人	45.8	41.9	7.6	1.5	3.2
21人～50人	56.2	34.6	4.9	1.2	3.0
～20人	64.5	28.5	3.8	0.0	3.2

2018年度後期授業アンケートは、実施575科目において、受講者数の平均は56.0人、回答率平均は83.8%であった。

総合充実度を問う「総合的にみて、この授業は充実していた。」との設問に対して、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」との肯定的回答は全科目平均で90.2%と高い数値を示した。

この数値は、教養教育科目89.0%、専門教育科目90.4%といずれにおいても高く、受講者別でも20人以下の科目で93.0%、21人～50人の科目で90.8%、51人～100人の科目で87.7%、101人以上の科目で89.2%と概ね高い数値であった。

科目ごとには、各担当教員によるリフレクションを掲載し、学生・教員向けにポータルサイトにおいて掲出している。

2－3　各種研修等

1．FD研修会

・日時：平成30年9月5日（水）　1回目：10：30～11：30
　　2回目：13：30～14：30

・場所：文化情報学部メディア棟001室

・内容：学生を惹きつける授業とは?

・講師：1回目：加藤昌彦教授（生活科学部）、脇田泰子教授（文化情報学部）
　　2回目：中嶋文子准教授（看護学部）、樋口謙一郎准教授（文化情報学部）

・参加者数

生	国	人	情	現	教	看	合計
23名 (57.5%)	19名 (70.4%)	18名 (60.0%)	20名 (71.4%)	12名 (60.0%)	18名 (64.3%)	31名 (70.5%)	141名 (65.0%)

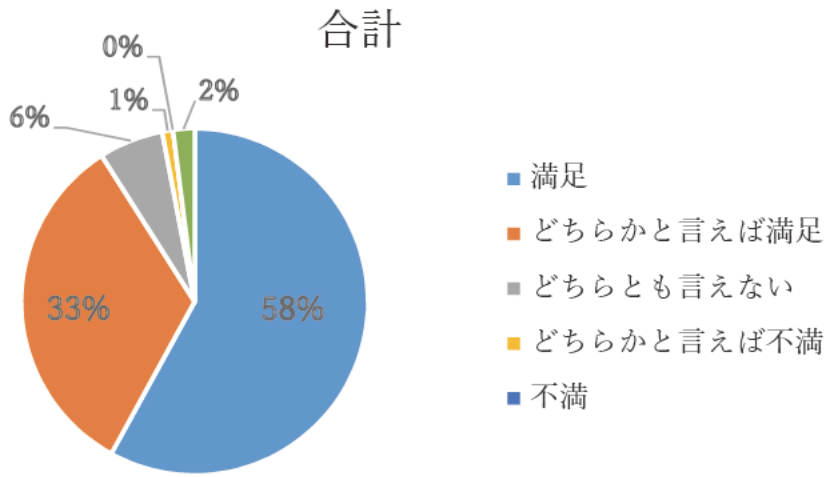
（参考：平成29年度実績）

生	国	人	情	現	教	看	合計
30名 (69.8%)	19名 (70.4%)	21名 (70.0%)	24名 (82.8%)	11名 (64.7%)	19名 (70.4%)	39名 (83.0%)	163名 (74.1%)

≪アンケート集計結果≫

Q.今回の研修会について全体としての満足度をお答えください。

	①満足	②どちらかと言えば満足	③どちらとも言えない	④どちらかと言えば不満	⑤不満	⑥回答なし
午前	34	23	3	1	0	2
午後	37	18	5	0	0	0
合計	71	41	8	1	0	2



２．Glexa（E-learningシステム）活用に向けての講習会

・日時：平成30年9月5日（水）　15：30～16：30
・場所：文化情報学部メディア棟240室
・内容：Glexa（E-learningシステム）活用のための講習
・講師：株式会社Version2（導入業者）講師
・参加者数

生	国	人	情	現	教	看	合計
0 名	2 名	0 名	1 名	0 名	0 名	3 名	6 名

その他事務職員４名

３．シラバスの記載方法に関するFD研修会

・日時：平成30年11月13日（火）、平成31年1月8日（火）
・対象：全専任教員
・内容：「シラバス記載上の留意事項」「シラバス記入上の注意」の確認及び共通理解

3　学部FD活動報告

３－１．生活科学部
３－２．国際コミュニケーション学部
３－３．人間関係学部
３－４．文化情報学部
３－５．現代マネジメント学部
３－６．教育学部
３－７．看護学部

3－1　生活科学部

生活科学部FD委員会委員

（生活環境デザイン学科）清水秀丸、滝澤愛
（管理栄養学科）佐久間理英 、小多沙知
（学部長・オブザーバー）加藤昌彦

【1】活動計画（目標）

①積極的な提案や活動が生まれるよう、FD活動の広報を工夫すること
②学部のFD活動を推進すること
③アンケートの回答を有効に利用すること
④予定されている学科行事をつつがなく達成すること

【2】実施報告

①委員会の開催

平成30年4月～平成31年3月の期間中、委員会はメール会議によりタイムリーに実施した。協議事項については、FD委員会或いは各学科会議・教授会にてそれぞれ臨機応変な手段で協議・決定した。

＜協議事項＞

・授業アンケートの実施は例年通り実施することを確認
・学部FD研修を実施することを確認
・昨年度と同様に、卒業時アンケートを実施することを確認
・学部FD委員会のウェブサイトの運営について、来年度も継続するかについて意見交換

②学部FD委員会ウェブサイト

学部FD委員会ウェブサイトの更新について議論し、今年度は現状のままとした。

③購入した書籍

FD活動に予算が割り当てられなかったために該当する執行はなし。

④平成30年度に企画・実施されたFD活動

平成30年7月　授業アンケート実施（全学）
平成30年9月　FD研修会（全学）
平成30年11月　FD研修会（学部）
平成30年後期　授業における学生FDスタッフの活用（2件）
平成31年1月　授業アンケート実施（全学）
平成30年2-3月 「今年度の振り返り」と「来年度の目標アンケート」の実施（全学）
平成30年3月　卒業時アンケートの実施（生活環境デザイン学科）

【3】課題点

・目標①については、学生に実施した授業アンケートにおいて、本学部は前期の実施率97.9％（全学97.5％）と全学的にみて高く、教職員から学生向けのFD活動は予定通り実施することができた。平成

31年度もさらにFD活動の意義をより丁寧に説明したうえで、特に教職員向けのアナウンスを増やし、積極的な提案や活動が生まれるよう努めたい。

・目標②についてはFD研修などへの参加の呼びかけをおこなった。9月に実施したFD研修会（全学）の出席率は57.5%（全学65.0%）と思わしくなく、今後も参加を呼びかける必要がある。また、昨年度に引き続き学部にFD活動のための予算がつかず、活動のしやすさが得られていないが、今後も検討を重ね、充実するように努める。

・目標③については、予定通り実施することができた。昨年度より実施している卒業時アンケートにおいて、学生の4年間の学びに対する感想・意見を把握できたことは、教員にとって今後の教育の指針を確かめるために大変有益であった。また、本年度も授業における学生FDスタッフの活用の呼びかけ、2名の教員から応募があり、授業の教授方法の質の向上につなげることができ有益であった。

【4】次年度へ向けた計画

平成30年度に掲げた目標①②③は達成されているが、FD活動を推進する積極的な力を更に高める必要がある。先ず、FD研修会（全学）のような参加型のFD活動にFD委員が率先して参加すること、教員に参加を促すことから始め、他の教職員の理解を助け、積極的な提案や活動が生まれるように、アナウンスの仕方を工夫する。また、FD委員自らも積極的に提案を考え、実施報告の内容が増えるように、学部の協力のもと様々な活動を実現していきたい。そのためには、既存の学部FD活動の現状をより詳細に把握していく必要もあるかもしれない。

「授業アンケート」の回答によると、両学科の学生とも総合的充実度は高いという結果であるが、現状に満足せず教員が個人レベルで更なる改良を試みることが必要である。そのため、このアンケートの回答を有効に利用し、教員個々の努力を促すと同時に成果をどのように授業に反映させるかは次年度も検討していきたい項目のひとつである。

卒業時アンケートは昨年度に引き続いての実施となり、得られた結果をふまえ、さらなる授業改善の材料としていくこと、ならびに卒業時アンケートの実施内容についても引き続き検討することが必要だと考えられた。

平成30年度　生活環境デザイン学科　卒業時アンケート【%】

1．専攻した分野のものづくりの実践を通して、快適な生活環境を創造することができる人材に、あなたはなれそうだと思いますか？

①なれそう	18.7	②ややなれそう	72.9
③あまりなれそうにない	7.7	④全くなれそうにない	0.6

2．生活環境について、生活者・消費者の視点をもとに、それを具体的なデザインとして提案・実践するための基本知識と技術を、身につけることができたと思いますか？

①できた	22.1	②ややできた	70.1
③あまりできなかった	7.8	④全くできなかった	0.0

3．今後、豊かな教養と人間性を培いながら、生活環境の向上に貢献できそうですか？

①できそう	29.9	②ややできそう	66.2
③あまりできそうにない	3.2	④全くできそうにない	0.6

4．生活環境を、生活者・消費者の視点から、科学的に探求することができるようになったと思いますか？

①なった	16.3	②ややなった	67.3
③あまりなっていない	16.3	④全くなっていない	0.0

5．専攻分野について、その知識と技術を身につけ、具体的なデザインとして提案・実践することができるようになったと思いますか？

①なった	28.8	②ややなった	60.1
③あまりなっていない	10.5	④全くなっていない	0.7

6．生活環境全般への幅広い視点を得たうえで、選択した分野において高度な専門知識を修得したと思いますか？

①修得した	18.7	②やや修得した	74.2
③あまり修得しなかった	6.5	④全く修得しなかった	0.6

7．生活環境に関わる諸問題に、修得した専門性を活かして創造的に取り組むことができると思いますか？

①できると思う	25.3	②ややできると思う	63.6
③あまりできない	9.7	④全くできない	1.3

8．ものづくりの喜びを感じながら、心地よい暮らしのデザインを、試行錯誤を重ねて提案できますか？

①できる	29.4	②ややできる	54.9
③あまりできない	15.0	④全くできない	0.7

9．職業人として必要な、生活環境に関する資格取得を可能にするような専門的技能を獲得し、豊かな表現力・企画力を身につけたと思いますか？

①身につけた	25.7	②やや身につけた	58.6
③あまり身につけなかった	15.1	④全く身につけなかった	0.7

10．入学時に目指した資格や免許に必要な科目を、履修することができましたか？

①できた	51.9	②ややできた	37.7
③あまりできなかった	7.8	④全くできなかった	2.6

11．本学科での４年間の学びは、あなたにとって充実したものでしたか？

①充実していた	60.6	②やや充実していた	36.1
③あまり充実していなかった	2.6	④全く充実していなかった	0.6

12．本学科の４年間の学びに、あなたは満足していますか？

①満足している	52.3	②やや満足している	42.5
③あまり満足していない	3.9	④全く満足していない	1.3

13．本学科の４年間の学びは、あなたの将来に役立ちそうですか？

①役に立つ	55.2	②やや役に立つ	40.3
③あまり役に立たない	3.9	④全く役に立たない	0.6

14. 大学生活全体は、楽しかったですか？

①非常に楽しかった	65.6	②やや楽しかった	31.2
③あまり楽しくなかった	2.6	④全く楽しくなかった	0.6

15. 本学科に愛着を感じますか？

①非常に感じる	47.4	②やや感じる	44.2
③あまり感じない	4.5	④全く感じない	3.9

16. あなたは本学科で 4 年間、がんばって学んだと思いますか？

①とてもがんばった	48.7	②まあまあがんばった	45.5
③あまりがんばらなかった	4.5	④全くがんばらなかった	1.3

17. 本学での学びは、あなたに自信をつけましたか？

①とても自信がついた	29.7	②まあまあ自信がついた	60.0
③あまり自信がつかなかった	9.7	④全く自信がつかなかった	0.6

18. 本学科の 4 年間の学びについて、ご自由にご意見・ご感想をお書き下さい

（建築）

・将来ずっと続けていきたいものと出会え、素晴らしい友人に出会えた
・充実した 4 年間でした。お世話になりました。
・良い友人ができました
・思っていたよりぐっと大変だったけど楽しかったです。
・大変だった。
・建築がより好きになりました。
・楽しかったです。
・学びたいことが学べて大変よかった。しかし模型置き場などの点で不便（置き場がないなど）と感じることが多々あった。
・有意義な時間を過ごせました。ありがとうございます。
・大変な学生生活でしたが、充実していました。

（インテリア）

・素晴らしい学びがいただけました。4 年間ありがとうございました。
・大変だった。
・ゼミ配属後、卒業研究で実際に手を動かして形にしたことで、一歩進めた気がしました。色々な経験ができてよかったです。
・様々な専門的なことを学ぶことができました。
・大変だったけど楽しかった。
・この学科でしか経験できないようなことをたくさん学べました。
・卒業制作が最も力になったと思う。
・課題が多くて大変だったけど、のりこえる力がついたと思う

（アパレル）

・制作の授業　3 コマで 1 単位は少ない。
・ゼミがとても充実したものになった
・先生方での情報共有をしっかりお願いします。あとは楽しかったです。
・大変だったけどふりかえると楽しかったなと思います。
・教授同士のトラブルを解決してほしい。
・課題が多くて大変でしたが、達成感がありました。
・専門的に学習できて満足しています。

3－2　国際コミュニケーション学部

水島　和則・横家　純一

はじめに

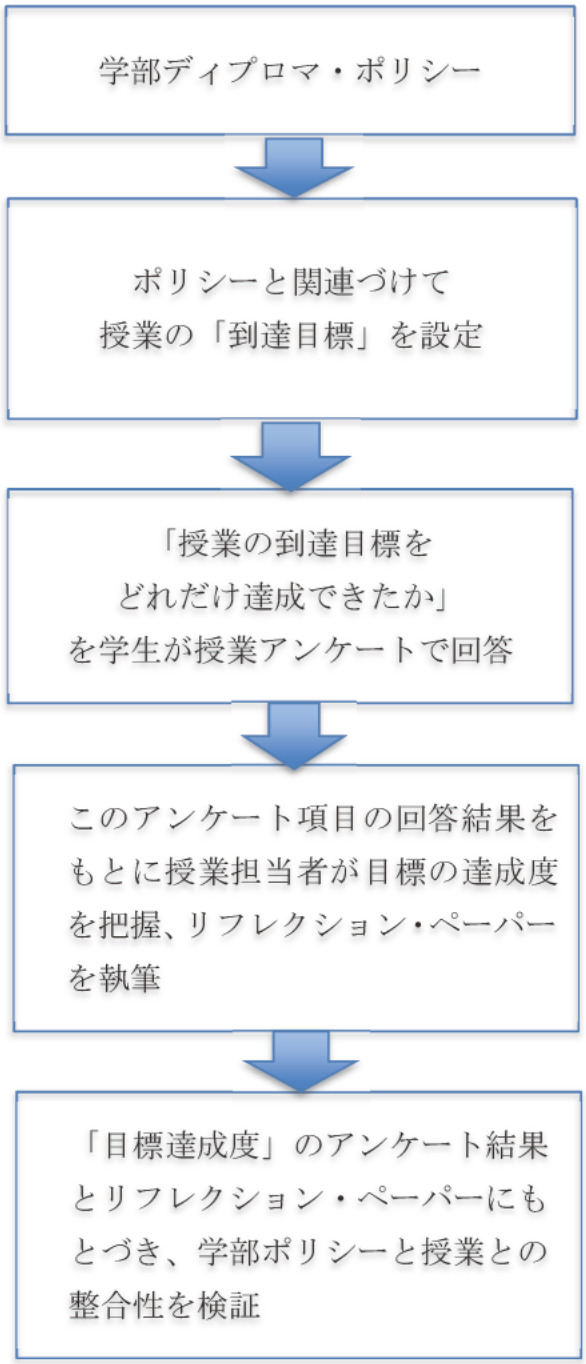
本学部では2014年に英語教育の更なる充実を目的としたカリキュラムの梃入れを行っており、その新カリキュラムの第一期生が2017年に卒業した。前年のFD報告では、毎年卒業式の時点で卒業生を対象におこなっている外国語科目の満足度調査をもとに、カリキュラム変更前後のアンケート結果を比較し、新カリキュラムの効果を検証した。しかしながら、限られた時間で実施するアンケートでは項目数が限られているため、新カリキュラムの効果について数字の差異の意味を立ち入って分析するうえでの十分な情報が得られなかった。

本原稿では、アンケート結果の分析を記述してきた前年度までと視点を変えて、学部ポリシーの検証に向けた取り組みについて報告する。前年度、FD委員と学部運営会議とが中心になり、上記のアンケート結果とは別の角度から、次のカリキュラム変更に向けた授業のさまざまな点検をおこなった。とりわけ焦点となったのが、学部ポリシー（ディプロマ・ポリシーならびにカリキュラム・ポリシー）と授業（を通した教育活動）との整合性である。この整合性を検証するため、次年度から新しいチェック体制を整えることになった。

非常勤講師も含めた全教員に対し、2019年度のシラバスを書く際にディプロマ・ポリシーを理解したうえで授業目標を設定してもらうように要請した。具体的な依頼文は、「来年度のシラバスをご執筆くださるにあたり、『授業の到達目標』という項目について、あらためて本学部のディプロマ・ポリシーをご理解いただき、ご留意のうえご記入ください」というものである。

いうまでもなく「授業の到達目標」は、授業シラバスの二番目の記載内容になり、一例を挙げれば「人種差別研究と移民研究の基本的視点を身につけるとともに、映画に代表される各種メディアが人種差別の存続／変化にどんな正負の効果を生み出してきたかについて感受性を養い、国際理解を深める」（エスニック・スタディーズ）のような文章である。

以上の措置により、シラバスにおける「授業の到達目標」の記載内容が学部ポリシーと関連づけられていることを前提として、授業アンケートの実施時に「あなたはこの授業の到達目標を達成することができたと思うか」という項目を質問事項に付け加え、受講学生に回答してもらう。担当教員がアンケート結果をふまえて執筆するリフレクション・ペーパーのなかで、この質問項目の結果についても言及する。以上のプロセスが周知徹底されれば、全開講科目について、学部ポリシーと授業内容との整合性やズレをモニタリングする体制ができあがる。これを図示したものが以下のフローチャートである。



このチェック体制を2019年度から開始するにあたり、専任教員に対しては2018年度後期の授業アンケートから、「授業の到達目標を達成できたか」を訊ねる質問項目を付け加えたうえでアンケートを実施し、その項目の結果に言及するリフレクションをおこなって文章を執筆するよう要請した。これは2019年度におこなうチェック体制を前倒ししておこなうことにより、この方法の有効性と問題点とを事前に検討するためである。もちろん、シラバスの授業目標を執筆した時点ではポリシーとの関連性を意識するような依頼をおこなっていないので、「前倒し」といっても不完全なものにとどまらざるをえない。それでも授業アンケートの項目として「あなたはこの授業の到達目標を達成することができたと思うか」と学生に問うことにどんな意味があるのか、他の質問項目との関連性においてこの問いが「冗長」ではないのか、などを考察する助けにはなる。

１「授業の到達目標を達成できたか」という項目のアンケート回答結果

2018年度後期、専任教員26名のうち24名が、それぞれの担当である46科目について、授業アンケートを実施し、リフレクション・ペーパーを作成した。このなかで、「あなたはこの授業の到達目標を達成することができたと思うか」という項目を付け加えてアンケートを実施しなかった科目が４つほどあるので、42科目について「授業の到達目標を達成したか」という質問に対する回答が得られたことになる。以下の表は、未実施の４科目を含めた46科目について、アンケート回答者が多い順にこの調査項目に対する回答の結果を並べたデータである。

到達目標のアンケート項目を付け加えて実施するのを忘れたと思われる４科目に加えて、無効に分類される回答が46.４％､35.１％に及ぶ科目がある｡おそらく､質問を付け加える指示が教室で学生に伝わらなかったか、教室で「授業の到達目標」を学生が確認できず、解答できなかったという事情によるものだろう。この授業アンケートの実施にあたっては、FD委員である横家が、すべての該当科目の「授業目標」を印刷してアンケートに同封し、各教員が板書する上で参照できるようにする、という準備をおこなったのだが、それでも無効回答の割合が比較的高い科目が多かった。

下記のデータの読み方を説明すると、最初にそれぞれの授業が、教養科目／専門基礎科目／国際言語リテラシー科目／学科専門科目（両学科）／学科専門科目（言語）／学科専門科目（表現）といった科目分類のどれにあたるのかを示している。人数の163／200名は、履修登録200名のうち、163名が授業アンケートに回答したことを示す。学科専門科目（両学科）とは､属する科目群が異なっても､国際言語コミュニケーション学科も表現文化学科も、専門科目に指定している科目である。次に、30.１％、48.５％、８.６％、０.６％　無効12.３％　という数字の羅列は、「その通りである30.１％」「どちらかといえばその通りである48.５％」「どちらかといえばそうではない ８.６％」「そうではない ０.６％」「無効12.３％」の省略である。太字になっているのが、広い意味で授業の到達目標を達成できた、という肯定的回答と解釈できる回答ふたつになっている。

アンケート回答者数の順序でみた到達目標達成度

１.教養科目（163／200名）	**30.１％**、	**48.５％**、	８.６％、	０.６％	無効12.３％
２.専門基礎科目（125／145名）	**35.２％**、	**54.４％**、	４.０％		無効６.４％
３.専門基礎科目（122／162名）	**23.０％**、	**50.８％**、	10.７％、	１.６％	無効13.９％
４.教養科目（120／136名）	**29.２％**、	**45.８％**、	５.８％、	０.８％	無効18.３％
５.専門基礎科目（106／145名）	**26.４％**、	**63.２％**、	６.７％		無効３.８％
６.専門基礎科目（92／120名）	未実施				
７.学科専門科目（両学科）（89／101名）	**36.０％**、	**43.８％**、	６.７％、	１.１％	無効12.４％
８.学科専門科目（両学科）（89／101名）	**65.４％**、	**30.８％**、	３.８％		
９.学科専門科目（表現）（88／117名）	**27.３％**、	**51.１％**、	１.１％		無効20.５％
10.学科専門科目（両学科）（87／145名）	未実施				
11.学科専門科目（表現）（85／93名）	未実施				
12.国際言語リテラシー科目群（82／99名）	**15.９％**、	**70.７％**、	11.０％		無効２.４％
13.学科専門科目（両学科）（79／110名）	**40.５％**、	**45.６％**			無効13.９％
14.学科専門科目（言語）（79／96名）	**29.１％**、	**53.２％**、	２.５％		無効15.２％
15.教養科目（73／99名）	**21.９％**、	**61.６％**、	16.３％		
16.学科専門科目（言語）（64／91名）	**４.７％**、	**65.６％**、	26.６％、	１.６％	無効１.６％
17.教養科目（64／71名）	**10.９％**、	**59.４％**、	17.２％		無効12.５％
18.教養科目（63／70名）	**22.２％**、	**49.２％**、	14.３％、	１.６％	無効12.７％
19.専門基礎科目（62／72名）	**27.４％**、	**56.５％**、	６.５％		無効９.７％

20.学科専門科目（両学科）（58／129名）	**20.7％、53.4％**、20.7％、３.４％	無効１.７％
21.専門基礎科目（57／121名）	21.1％、40.4％、３.４％	無効35.1％
22.専門基礎科目（52／66名）	**38.5％、44.2％**、５.８％	無効11.5％
23.教養科目（45／48名）	**53.3％、31.1％**	無効15.6％
24.国際言語リテラシー科目群（43／55名）	**18.6％、62.8％**、７.０％	無効11.6％
25.学科専門科目（言語）（42／45名）	**59.5％、33.3％**	無効７.１％
26.専門基礎科目（37／40名）	未実施	
27.専門基礎科目（36／39名）	**50.0％、41.7％**、５.６％	無効２.８％
28.学科専門科目（表現）（33／40名）	**30.3％、45.5％**、12.1％、３.０％	無効９.０％
29.国際言語リテラシー科目群（30／31名）	**46.7％、33.3％**、３.３％	無効16.7％
30.学科専門科目（表現）（30／37名）	**30.0％、53.3％**、６.７％	無効10.0％
31.学科専門科目（表現）（28／39名）	**35.7％、17.9％**	無効46.4％
32.国際言語リテラシー科目群（26／27名）	**19.2％、57.7％**、３.８％	無効19.2％
33.学科専門科目（表現）（26／28名）	**34.6％、53.8％**	無効11.5％
34.学科専門科目（言語）（25／30名）	**56.0％、40.0％**	無効４.０％
35.国際言語リテラシー科目群（21／23名）	**85.7％、14.3％**	
36.国際言語リテラシー科目群（20／22名）	**45.0％、25.0％**	無効30.0％
37.国際言語リテラシー科目群（20／20名）	**50.0％、30.0％**、10.0％	無効10.0％
38.国際言語リテラシー科目群（20／22名）	**30.0％、60.0％**、10.0％	
39.国際言語リテラシー科目群（20／20名）	**35.0％、45.0％**、15.0％	無効５.０％
40.国際言語リテラシー科目群（19／20名）	**68.4％、31.6％**	
41.学科専門科目（表現）（19／21名）	**42.1％、42.1％**、５.３％	無効10.5％
42.学科専門科目（言語）（19名）	**52.6％、31.6％**、10.5％、５.２％	
43.学科専門科目（両学科）（16／27名）	**６.２％、31.3％**、18.8％、25.0％	無効18.8％
44.学科専門科目（言語）（11／11名）	**63.6％、36.4％**	
45.学科専門科目（言語）（９／９名）	**33.3％、44.4％**、11.1％	無効11.1％
46.国際言語リテラシー科目群（７／10名）	**42.9％、42.9％**、14.3％	

42科目の平均をみると、「その通りである」36％、「どちらかといえばその通りである」44.4％となり、ちょうどその合計が80％になる。「到達目標を達成できた」という設問に対して肯定的に回答した学生の割合がきわめて高いことがわかる。無効に分類される回答の割合が３割以上だった２科目を除くと、１科目（43番目）を除く全科目で、７割以上の学生が肯定的回答をしている。８割以上が肯定的回答をした科目も27科目、全体の67％に及ぶ。この結果をストレートに解釈すれば、本学部専任教員の担当科目に関する限り、シラバスに記載された到達目標を達成するという意味で、本学部の授業はその役割を果たしているといえる。

先に指摘したように、2018年度のシラバスにおける「到達目標」は、学部のディプロマ・ポリシーとの関連性に留意して書かれたものではない。したがって、以上の結果から学部ポリシーが授業を通して教育活動のなかで機能していると結論づけることはできない。学部ポリシーと連動するように授業の到達目標が書かれた2019年度になって、この項目のアンケート結果がどのように変わったのかは、来年度の分析に委ねられる。

２　「授業の到達目標」という項目の回答パターンの分析

次に、この項目の回答パターンの特徴について考察したい。まず、到達目標の達成度と**受講人数**との間には明白な関連性があり、「到達目標を達成できた」という設問に「その通りである」と答えた者の割合は、回答者50名以上の授業で27.７％、50名未満の授業で43％と15ポイントに近い大きな開きがある。とはいえ、

「どちらかといえばその通りである」を合わせた肯定的回答については77.6％に対して82.6％と、開きは小さくなる。受講人数による達成感の違いについては、この数字以上にその差が大きい可能性もある。というのも、人数50人未満の少人数クラスには、おそらくは不人気のために「小人数」になってしまった授業も含まれ、平均を押し下げているためだ。たとえば、もっとも達成感の低い授業ひとつを除外しただけで、「到達目標を達成できた」と回答した者の50人未満の授業の平均は45ポイントまで上がる。この一方で、到達目標と科目のカテゴリーとのあいだには、有意な相関はみあたらない。

授業の**総合的充実度**（設問12）の回答と比べてみると、「授業の到達目標を達成」についての回答は肯定的回答の割合が大幅に下がる傾向がある。総合的充実度についていえば、本学部の（非常勤講師担当の授業を含めた）平均は「その通りである」が53.9％、「どちらかと言えばその通りである」が37.3％で、9割の学生が肯定的回答をしている。専任教員の科目だけに絞れば、この割合はさらに高くなるだろう。これに対して、到達目標達成に対する肯定的回答は、総合的充実度よりも10ポイントほど低い。

「その通りである」と回答した「積極的肯定」だけに絞ると、総合的充実度と到達目標達成との違いはさらに顕著になり、50～20ポイントほど、到達目標達成の方が低い。肯定的回答の割合において、到達目標達成感の項目の方が総合的充実度よりも高かった科目はひとつもない。全体としてその授業が充実していたと感じていても、授業の到達目標を達成したとは自己評価できなかった学生が多いことは明らかである。

それでは、「到達目標の達成感」と近い回答パターンを示す質問項目はどれだろうか。設問 2 と設問 3 の、**シラバスに関わる質問項目**がそれにあたる。アンケートの設問 2 は、「このシラバスの主な内容を覚えている。あるいは、毎回・時々シラバスの内容を確認し受講している」、設問 3 は「この授業は概ねシラバスの内容に沿った授業が行われた」という項目である。一般的に言って設問 2 は、設問 9 「予習や復習など、自主的な学習を行った」と並んで、アンケート全体のなかでもっとも学生の評価が低い（「どちらかといえばそうではない」「そうではない」の割合が高い）質問項目になっているが、設問１３の「到達目標の達成度」の回答パターンは、設問 3 の回答パターンに近いケースが非常に多かった。

シラバスの把握度、ならびにシラバスと授業との整合性を訊ねる質問と、授業の到達目標を達成できたかどうかを訊ねる質問の回答パターンが似通っている理由は明白である。授業の到達目標もシラバスに記載されているので、これらは同種の質問といえる。いずれの質問項目も（到達目標を含めた）シラバスについて、学生本人があらかじめ把握していることを前提としている。そのうえで、①シラバスを知っているか　②シラバスに沿った授業が行われたか、③シラバスに記載された授業の目標を学生の方が達成できたか、を聞いている。②は担当教員と授業について評価するものだが、①と③は、学生本人の自己評価となる。一般的に言って、予習・復習にかかわる項目も含めて、学生は教員のパフォーマンスを評価する質問項目よりも、自分のパフォーマンスを評価する、つまり**自己評価を求めた質問項目**について、厳しく回答する傾向がある。授業目標達成度に関わる質問も、その例外ではない。

最後に、各教員が執筆したリフレクション・ペーパーの文章のなかで、授業目標達成度に関する質問の結果がどのように受け止められているかについてふれたい。この数字に言及していない教員も多いが、ふれている場合もほとんどの場合、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」を合わせた回答の割合が高く、学生も授業の目標を達成できたといえる、という程度の記述にとどまっている。これは当然のことで、結果を解釈しようとしてもこれ以外には書きようがないからであり、またそう結論づけることにとくに支障はない。

問題点があるとすれば、無効になった回答の割合が高いことである。無効票には、アンケート回答中に「到達目標」を覚えていない、思い出せないから答えようがなかったケース、到達目標そのものは板書されて知ったものの、それを念頭において授業を受講してこなかったので、達成できたかの質問に答えようがないケースなど、いくつかの異なったケースが考えられる。今年度の実施にあたっては、無効回答を減らしていくためのさらなる工夫が求められる。

３　おわりに　――授業アンケートを通したディプロマ・ポリシーの検証は可能か――

以上、「授業の到達目標を達成できたか」を訊ねる質問項目を授業アンケートに付け加えることの意味、それがディプロマ・ポリシーの検証につながりうるかの評価といった観点から、2018年度の授業アンケート追加項目の回答結果を分析してきた。

まず、「無効」に分類される回答の割合が高いという問題点があきらかになったので、それを改善するための方法について検討したい。次に、「授業の到達目標の達成度」を訊ねる一つの質問項目からポリシーの点検ができないか、というアイディアもそれなりに有効ではあるが、他の質問項目との回答パターンを比較してみることにより、既存の質問項目もポリシーが機能しているかどうかの点検に使えるのではないか、という新たな課題も得られた。とりわけ、学生が自分のパフォーマンスを自己評価することを求める質問項目については、ポリシーがいかに機能しているかと密接に結びついているとみることが可能である。

考えてみれば、これまで授業アンケートは教員の自己点検、セルフ・リフレクションのために用いられるか、あるいはベストティーチャー選出のような教員の評価に用いられるだけだった。しかし、アンケート結果の全体を分析することにより、授業アンケートを全体としてポリシーの検証や学修成果の可視化のために役立てられる余地があるように思われる。そのような可能性に気づけたことが、2018年度後期に専任教員の協力を得て実施した予備調査の大きな成果だったといえる。

3－3　人間関係学部

1．本年度のFD活動の特徴

平成30年度の人間関係学部の日常的教育研究活動以外の組織活動の特徴は以下の点である。一つ目は、平成29年度から実施してきているカリキュラム改革のにおけるモジュール制が本格的に導入される年度となったことである。

二つ目は平成30年度の心理学科入学生から適用される国家資格である公認心理師受験資格取得に向けたカリキュラムがスタートする年度となったことである。

三つ目は全教員を対象としたFD研修会を教授会終了後に開催をしたことである。

2．学部FD活動の概要

①カリキュラム改革に関連したFD活動

平成29年度に実施されたカリキュラム改革によって、人間関係学科及び心理学科の２学科について11のモジュールが設定され、それぞれのモジュールに関係している主要な科目や教員については学生に「履修の手引」等によってアナウンスされている。今年度は、モジュール制を導入して初めての学生による卒論事前指導ゼミの選択・選抜が実施された。卒論指導に関しては、従来は人間関係学科では３年時から卒論を意識して演習科目を選択することが求められていたが、心理学科では４年時の卒論指導から卒論に取り組むという形態をとっていた。カリキュラム改革により、両学科ともに３年後期に「卒論事前指導ゼミ」が設置されることとなった。今年度は、２年生を対象として初めての「卒論事前指導ゼミ」の教員を選択するという希望調査が実施され、担当教員が確定することとなった。このことは、前記のモジュール制によってメインモジュール、サブモジュールを選択するということにも繋がっている。

心理学科では、国家資格である公認心理師受験資格取得を目指すカリキュラムが平成30年度入学生からスタートした。学生にとっては国家資格は関心のあるものであるが、心理学科入学生全員が資格取得を目指すことができるわけではなく、２年時に選抜を行う予定となっている。受験資格取得に関するガイダンスを新入学生オリエンテーションの中で説明を行った。

②学部学生の協力を得ての活動

椙山女学園大学では、１年生を対象としたコンピテンシーテストを全学部で実施している。人間関係学部では１年時の必修科目である「ファーストイヤーゼミ」の中でこのテストを実施し、また学生に対するフィードバックも行っている。教員に対しては、コンピテンシーテストの結果の報告会を別途開催しており、新入学生の現状を把握し、その内容を授業内容の改善などに利用している。

また、同じく「ファーストイヤーゼミ」のおおよそ２／３回が終わった頃に、学部３年・４年生の学生リーダーによるチュートリアルセミナーも開催されている。このセッションでは授業開始時には担当教員も在室しているが、その後は学生リーダーに運営を任せている。１ヶ月半後には前期の定期試験が予定されているので、試験についての説明や試験勉強の行い方、レポートの作成法などについて、先輩である学生リーダーに説明をしてもらったり、質問に応えてもらうことを意図したセッションである。なお、この学生リーダーは新入生対象の交流遠足において学生リーダーとしての役割を担ってくれた学生達と重なっている。

心理学科２年時の必修科目である心理学実験では例年大学院生にTAとして入ってもらっているが、今年度は大学院人間関係学研究科人間関係学専攻臨床心理学領域の入学生が例年と比べて少なかったため、後期の心理学実験において、FD予算を申請して、学部４年生でかつ大学院進学が決まっている学生２名にFDスタッフとして実験の援助をしてもらった。

また、現在心理学科で必修となっている卒論発表会は、平成31年 2 月 1 日に今年度も心理学科は 3 年・4 年生全員参加として、人間関係学科では有志の教員の指導生を対象として開催された。心理学科では、卒論発表会の運営にあたり、4 年生15名、3 年生 8 名がボランティアのスタッフとして参加をした。なお、この卒論発表会は、カリキュラム改革後のモジュール制が導入された学年が 4 年生となる時には両学科必修として開催されることになっている。

③教員主体の活動

人間関係学部では平成31年 1 月 8 日の15時30分～16時05分にかけて、教員対象の学部・大学院共通のFD研修会が開催された。学部FD委員によって、シラバス記載の留意事項について説明し、その後活発に議論が行われた。また、平成30年度の学部FD活動についての確認も行った。なお、当日欠席をした 2 名の教員については、FD委員から個別に説明が行われた。

また、全学的に行われている「学生総合満足度調査」については、教授会にて資料が示され、教育体制や教育内容の見直し、要支援学生への対応などの授業改革に役立てている。

「学生の学修時間等に関する調査」については、各学科で必修科目などなるべく多くの学生の回答を得られるように工夫をして実施を行った。

3－4　文化情報学部

平成30年度における文化情報学部のFD活動は、下記の計画を実行した。

成果物は全26ページのPDFであり、名称：平成30年度文化情報学部ＦＤ活動報告書、編集：見田隆鑑・谷口俊治、発行：椙山女学園大学文化情報学部として平成31年３月28日に刊行された。

平成30年度文化情報学部FD活動計画

■教員自身によるシラバスのチェック

授業終了後に、実際に行った授業内容を振り返り、シラバスに記載した授業計画に沿った授業を行えたか、到達目標は達成させることができたかどうかを各自点検することを通し、学生との授業契約でもあるシラバスの改善、また授業自体の改善を図る。

・授業アンケートの内容も踏まえながら、自身の作成したシラバス（１科目）について各自点検・評価を行う。

・事前・事後の学修について、シラバスに記載した内容に対する学生の取り組み状況、授業前に準備が必要な内容（課題、発表等）についての学生の取り組み状況について可能な範囲で報告する。

■授業を行う環境・設備に関する状況報告

１回毎の授業内容を適切に実施できる教育環境が整っているかどうか、教員からの声、学生からの声を確認することを通し、学部全体で必要と思われる教育環境の整備・改善を図る。

・教員の視点からの授業環境・設備に関する報告

（授業アンケートでの学生のコメントもあれば反映させる）

例１）設備の不具合により授業を中断するような状況

※マイクの充電切れ、映像・音声の不具合、リモコンの電池切れ　等

例２）空調など教室の環境

■オフィスアワーの活用・実施状況報告

他の教員のオフィスアワーの実施状況を知る。課題・問題等があれば情報を共有する。

・各教員のオフィスアワーでの学生対応の状況の報告、その中での課題などを取り上げる。

・・

■報告書の書式等

Ａ4　１～２枚。段組み、フォント種・サイズなどは、原稿が揃ってから調整する。

■記録と保存および公開：学部FD活動の成果としては、PDFとして刊行し、各教員に配布する。

以上

3－5　現代マネジメント学部

第２節：現代マネジメント学部　主任　東　珠実
その他：現代マネジメント学部　教務委員会ＦＤ委員　吉本明宣

１．現代マネジメント学部におけるFD活動

現代マネジメント学部における独自のFD活動は、①「学生生活評価アンケート」の実施、②「教育研究報告」の発行から成る。

平成26年度まではこれらに加え、現代マネジメント研究会（FD講演会）が行われてきたが、平成27年度以後は予算が下りず実施できなかった。他は前年度と同様の内容が実施された。

本報告では、「教育研究報告書」に記載された、「平成29年度本学部教員の教育研究活動について」と「学生生活評価アンケート」の実施結果概要を報告する。

２．平成30年度本学部教員の教育研究活動について

はじめに、今年度の教育活動をふりかえる。本学部では平成25年度から経営関連科目の充実を図ったカリキュラムを展開してきたが、平成30年度入学生から、さらに現代ビジネスに関するより実践性の高い能力の育成を目指して新カリキュラムをスタートさせた。新カリキュラムでは、「経営・会計」、「総合政策」、「キャリア」の３領域が設置され、企業、地域・公共、国際などの様々な分野で活躍できる即戦力のある人材の育成を目指している。特にキャリア領域においては、具体的な資格やスキルの取得を意図した科目が多数設置されることになった。一方、大学院現代マネジメント研究科では、従来からイノベーションマネジメント能力を備えた知的人材の育成を目指している。社会人にも開かれた同研究科では、昨年度の社会人大学院修了生が今年度税理士資格を取得した。また、今年度は新たに２名の院生を迎えている。今後も学部から大学院まで、マネジメントの専門能力を携えて実社会で活躍できる女性を輩出できるよう、丁寧な教育活動に努めていきたい。

本学部ではまた、学部の専門性を生かし、就職活動に強い学生を育成することを目指して、アクティブ・ラーニングをはじめ、企業や行政等と連携した教育活動を展開している。今年度も多数の教員が取り組んできたが、さらにその質量の充実をはかり、学部の独自性を堅持していきたいと考えている。

次に、研究活動を総括する。上記の教育活動と併せて、今年度、本学部教員（教授８名、准教授９名、講師３名の合計20名、年度途中で准教授１名が転出）が実施してきた研究活動をとりまとめると、下表のようである。「著書・学術論文」、「特許・その他」とも前年度に比べて増加しており、総じて積極的な研究活動が行われているが、教員間の個人差が大きい点が懸念される。一方、本学部教員による学外の研究助成金の獲得件数は減少しており、所属学会や学外委員の数も若干減少している。専門分野による違いもあるであろうが、研究資金の一層の獲得や学会活動や学外活動への参画が課題といえる。

このほか、学部独自のイベントとして、今年度第６回目となるビジネスプラン・コンテストが開催され、学内外から積極的な応募があった。また、学生ピアサポート「チーム・レナータ」は、今年度、株式会社資生堂との連携によるメイク講座や、就職壮行会などを実施してきた。今後も、このような学生有志による主体的な取組を学部を挙げて支援していきたい。

「教育研究報告」にみる学部教員の研究活動の推移（過去 3 年間を基本とする実績）

項　　目	第15回教育研究報告（平成28年度）	第16回教育研究報告（平成29年度）	第17回教育研究報告（平成30年度）
著書・学術論文	2.9編	4.0編	4.2編
特許・その他	7.5編	4.8編	6.5編
著書等　　小計	10.0編	8.8編	10.6編
研究助成金（学内）	0.3件	0.2件	0.1件
研究助成金（学外）	1.1件	1.0件	0.7件
研究助成金　小計	1.4件	1.2件	0.8件
所属学会	4.0件	4.2件	3.9件
学外委員	2.0件	2.1件	1.7件

＜注＞１．表中の数字は教員１人当たりの数字である。

３．学生生活評価アンケート（第17回）：概要

調査期間：

平成30年12月３日（月）～12月21日（金）

調査対象：

椙山女学園大学 現代マネジメント学部 在学生805名（休学除く）
（１年生183名、２年生253名、３年生178名、４年生189名）
回答数：618名、回答率76.8％

調査目的：

全学FD（ファカルティ・デベロップメント:教員の教育能力の向上）活動の一環として、現代マネジメント学部の学生が本学での生活をどのように受け止めているかを調査した。今回も過去の15回とほぼ同じ項目について回答を求めた。本学部における教育と学生生活の質的向上のための基礎資料を残すことを目的として、この結果を記載する。

調査項目：

１．カリキュラム

カリキュラムの満足について、肯定的回答（よく当てはまる、または少し当てはまる）は、「語学科目」では68.1％（68.3％）（以下、カッコ内の数字は前年度の結果）、「情報科目」では77.6％（76.8％）、「その他教養科目」では82.0％（81.8％）、「専門科目（経営）」では84.8％（83.2％）、「専門科目（経済）」では77.9％(76.0％)、「専門科目(法律)」では84.2％(81.9％)、「専門科目(政治)」では86.5％(83.7％)であった。「情報科目」の到達度別クラスの導入について、肯定的回答は66.9％（65.4％）であるが、教養教育科目の全学共通化によって、本学部での導入は現状では困難である。

「専門プレゼミ」「基幹演習」「展開演習」を担当する先生を選択する際の理由については、「演習の学問分野やテーマに関心があったから」が36.1％(42.6％)で一番高く、次いで「担当の先生の魅力から」が28.8％(31.8％)であった。

新年度初めのオリエンテーションの出席について、肯定的回答が87.8％（87.7％）であった。単位制度の仕組みの理解について、肯定的回答が82.6％（80.6％）であったのに対し、履修と成績評価に関する説明や手続きの分かりやすさについては、肯定的回答が66.1％（66.0％）と比較的低かった。説明は毎年少しずつ改善されているので、要因としては学生側の質的変化が考えられる。この質的変化を折り込んだ対策が必要

であろう。
自由記述回答では、年間の履修単位の上限をなくすことを求める記述が散見した。

2．大学の環境

環境（主に施設）の満足では、ハラスメント相談室、図書館、チケットサービスコーナー、トイレについて、肯定的回答は70～90％程度であった。特に大学の中枢施設のひとつである図書館については、肯定的回答が88.7％（85.6％）であり、前年度よりやや高かった。なお、一昨年度改装された学生控室については、90.7％（89.9％）と昨年同様評価が高かった。一方、売店、書店などについては、例年同様、評価は比較的低い。
自由記述回答では、コンビニエンスストアやATMの設置、エレベーターの増設を求める記述が多かった。今回の自由記述回答では、これらの要望が多く、大学側も何らかの対策を考える必要があるであろう。

3．事務職員の窓口対応

学内の各窓口での対応について、肯定的回答は、各部署ともおおむね80％～90％程度であった。特に、キャリア支援課への肯定的回答が多く（87.2％）、今後とも丁寧な対応が期待されるところである。

4．他学部開放科目について

他学部の開放科目の参加について、肯定的回答が78.1％（72.4％）であり、関心を持っている学生の割合は比較的高いが、よく利用したとする肯定的回答は38.5％（46.4％）ときわめて少ない。

5．学部間・他大学間との単位互換、所定の資格等の単位認定

単位互換や資格等の単位認定の希望について、肯定的回答は72.1％（75.5％）であった。自由記述回答では、資格の単位認定を求める記述は多いが、他大学との単位互換についての記述は少なく、学生が内向きになっていく傾向が見られる。

6．就職指導

キャリア支援課による就職指導を受けた学生では、就職指導について、肯定的回答は77.6％（70.9％）で若干増加している。また、同課が主催する各種講座についても、肯定的回答は77.2％（73.3％）であり、前年度より増加している。
自由記述回答では、相談員の増加などの要望が多く、今後とも改善の余地があるであろう。

7．インターンシップ

インターンシップの有効性について、肯定的回答は79.1％（82.8％）であり前年度よりやや減少した。また、実際に参加した学生の満足について、肯定的回答は74.1％（84.3％）でこちらも前年度より若干の減少が見られる。
自由記述回答では、不満がいくらか記載されており、インターンシップ先の選定や事前・事後指導などに工夫が必要である。

8．奨学金制度

本学の奨学金制度に対する学生の認知について、肯定的回答は36.0％（33.6％）である。極めて低い認知度であるが、周知体制よりも学生側の情報収集能力の低下の方が懸念される。本学の奨学金受給者の満足について、肯定的回答は65.5％（67.8％）で、奨学金制度全体の充実について、肯定的回答は61.6％（65.4％）であり、数値の低さから、学生を取り巻く経済的状況の悪化が懸念される。
自由記述回答では、成績優秀者に対する学費半減などの優遇制度への要求の記述もある。

９．学生生活等

例年同様、予習・復習は、合わせて週平均２時間程度しか行なわれていない。しかしながら、授業についていけることについて、肯定的回答は76.1％（74.1％）と数値が高い。入学偏差値の低下を考慮すると、多くの教員が単位認定を毎年かなり緩めながら行っていることが分かる。逆に、課題の多い教員や試験の難しい教員のクラスは学生が集まらず閉講となる傾向があり、本学部が今後、高等教育機関としての体を維持しようとするのであれば、少なくとも単位認定について抜本的な対策を講ずる必要がある。

他方、アルバイトは週平均3.5日（3.2日）、17.1時間（16.9時間）行なわれている。従って、講義を加えた学習時間の週二十数時間程度（大学設置基準第21条第２項は、週六十数時間程度の学修が必要と規定）と比較すると、本学部の学生は平均的に、学生20：アルバイト17の存在であることがわかる。この比率はここ十年程度あまり変わっていないので、このことへの対応姿勢を含め、今後の学部のあり方を検討する必要がある。

10. 学生生活全般

学生生活全般に対する学生の満足について、肯定的回答は84.1％（84.1％）であり、比較的好印象を抱いている学生が多い。

以上

3－6　教育学部

教育学部FD委員　國井修一

1．第１回椙山女学園大学教育学部・同研究科FD講演会

日　時：平成30年9月11日（火）教授会終了後、約60分
場　所：教育学部会議室
テーマ：「現代の学校教育改革の動向」
講演者：伊藤博美（教育学部教授）
対　象：教育学部教員
概　要：2015年からOECDが取り組んできたEducation2030プロジェクトについて、現代の生徒が成長して、世界に切り拓いていくためには、どのような知識やスキル、態度及び評価が必要か、学校や授業の仕組みが、これらの知識やスキル、態度及び評価を効果的に育成していくことができるようにするためにはどのようにしたらよいかについて講演した。

2．第２回椙山女学園大学教育学部・同研究科FD研修会

日　時：平成30年10月2日（火）15：00－16：00
場　所：教育学部棟C310教室
テーマ：「入学生の傾向から教育学部の将来を考える」
講演者：黒田紀夫（ベネッセ）
対　象：教育学部教員

本学新入生を対象にした基礎力レポートⅠの結果報告。大学・学部選択時の意識について、本学部学生は「将来なりたい職業に就くために役立つ専門知識や必要な資格や免許をとる」と回答した学生が、大学全体が28.0％であるのに対して、本学学生は60.6％であり、学部選択に目的意識が明確であることが報告された。

3．第３回椙山女学園大学教育学部・同研究科FD研修会

日　時：平成30年11月13日（火）教授会終了後　20分
場　所：教育学部会議室
テーマ：「シラバスの作成方法についてのＦＤ」
講演者：國井修一（本学ＦＤ委員）
対　象：本学教員

シラバス作成においては、ア）準備学習（予習･復習）、イ）課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法、ウ）授業における学習の到達目標及び成績評価の方法・規準、エ）卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連、オ）当該授業科目の教育課程内の位置付けや水準を表す数字や記号（ナンバリングを含む）を明示することが求められていることを示した。

4．第４回椙山女学園大学教育学部・同研究科FD研修会

日　時：平成31年1月26日（土）16:00～17:00
場　所：第一会場B307
テーマ：「これからの幼児教育」
講演者：山中文附属幼稚園園長・石橋尚子前附属幼稚園園長

対　象：本学卒業予定者および在学生

・山中文附属幼稚園園長：幼児の発達段階における言葉や音の認識の具体例を示しながら、新しい教育要領や今後の教育課題をふまえて実践研究を進めていく必要性を強調した。

・石橋尚子前附属幼稚園園長：高めたい保育の質・保育士の質について、人、環境、内容、制度・方向性を示した。幼児教育の楽しさや責任の重さ、保護者との関わり合いなど、具体的事例を示した。

場　所：第二会場　B308

テーマ：「これからの児童教育」

講演者：森　和久附属小学校校長・宇土泰寛元附属小学校校長

対　象：本学卒業予定者および在学生

・森　和久附属小学校校長：新しい指導要領のキーワードの１つであるカリキュラムマネジメントについて附属小学校の実践例を紹介。学校の月の生活目標と校長講話、各教室の月目標、道徳の教材と関連付け、教育効果の実例を示した。

・宇土泰寛元附属小学校校長：附属小学校を地域や世界に開いた取組の紹介。地域からの要請をキャッチして教育活動に生かす柔軟性、オーストリア、フランス、アフリカの小学校と交流するなどの創造性が重要であることを強調した。

3－7　看護学部

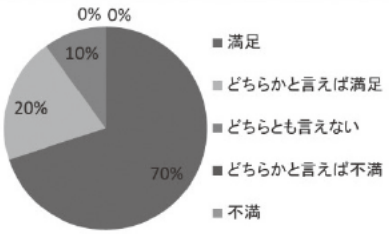
北川かほる、髙植幸子、奥川ゆかり、野中光代

Ⅰ．平成30年度看護学部FD研修会開催について

平成30年度看護学部FD研修では、テーマ「学生による授業評価が高い授業の取り組み」と題した企画に基づいて開催し、参加者から授業に役立つとの結果が得られた。

1．開催日時：平成30年 9 月19日（水）16：40～18：10
2．開催場所：椙山女学園大学看護学部　205
3．テーマ：学生による授業評価が高い授業の取り組み
4．目的：本学部で初めてベストティーチャー賞を受賞された中嶋先生の授業の取り組みの実践について紹介していただき、授業の取り組みについての改善のヒントを得る。中嶋先生の実践内容を踏まえ、各教員が授業の改善に向けて、学生が興味を引くために気をつけていること、学生が理解しやすいように工夫されていること、難しさを感じていること等を話し合う。
5．研修内容：開催の挨拶　5 分
　　中嶋文子先生の講義　30分
　　グループでの話し合い　30分
　　グループでの意見交換会　20分
　　おわりの挨拶　5 分
6．参加状況：参加者39名
7．アンケート結果
　「学生による授業評価が高い授業の取り組み」については、アンケート提出者30名のうち21名が「満足」、6 名が「どちらかと言えば満足」と回答し、90％がほぼ満足という結果が得られた。

Q１　今回の学部FDの企画内容はいかがでしたか。



Q２　「満足・どちらかと言えば満足」の自由記述

アンケートの自由記述より、前半の「中嶋先生による学生による授業の取り組みの実践についてのご紹介」は、大変参考になったとの意見が多数みられた。

後半の「教員間での授業・実習で気をつけていること、工夫していること、困難を感じていること等の話し合い」は、他領域の先生の意見が参考になり、間もなく始まる後期の授業・実習に反映できそうとの意見が多数みられた。

Ⅱ．学生による授業（実習）評価の実施について

1．活動の経緯

平成28年度より、S*mapのアンケート機能を用いた学生による実習評価の試行を開始した。平成29年度は、基礎看護学実習（7 期生；2 年次）、総合実習（5 期生；4 年次）、領域別看護学実習（6 期生；3 年次後期）において、実習評価を試行した。平成30年度は、早期体験実習（9 期生；1 年次）、成人老年ベーシック実習（7 期生；3 年次前期）を追加し、課題探究実習（4 ～5 名の少人数実習）を除く全実習12科目において実施した。評価項目は、昨年度の項目内容を踏襲した。また、結果を受けての教員からのリフレクションについても、評価を実施した実習科目すべてにおいて、学生へ公開済である。

2．回答率と科目責任者へのデータの引き渡し方法

前期終了の公衆衛生看護学実習（産業）を除く実習は 8 月末日を、一斉実習ならびに公衆衛生看護学実習（産業）については、実習終了後 2 週間を目途に回答終了日を設定した。回答率（表 1）は、53.3 %から94.9 %と幅があった。その理由として、授業開講中の一斉実習では、学生同士の情報交換があり回答率が上がるが、夏季休暇中や定期試験直前に終了する実習は、ジャーナルでの回答依頼のみで促しを行ったことが挙げられた。

得られたエクセルデータは、回答学生が特定できないよう、回答日順のデータをランダムに変更し、IDを削除するなどの加工をして、USBメモリに保存し、前期科目は 9 月18日に、その他の科目は回答終了日 2 週間後を目途に、各実習の科目責任者に渡した。

表 1．教員によるリフレクションまで完了した実習の回答率

期生	科目名	回答終了日	回答者数	回答率
6 期生	母性看護学実習	8 月末日	87/107人	81.3
	小児看護学実習（病院）	8 月末日	85/107人	79.4
	小児看護学実習（幼稚園・保育園）	8 月末日	89/107人	83.2
	急性期成人老年看護学実習	8 月末日	88/107人	82.2
	慢性期成人老年看護学実習（病院）	8 月末日	88/107人	82.2
	慢性期成人老年看護学実習（施設）	8 月末日	87/107人	81.3
	精神看護学実習	8 月末日	82/107人	76.6
	在宅看護学実習	8 月末日	94/107人	87.9
	公衆衛生看護学実習（行政）	8 月末日	8 /15人	53.3
	公衆衛生看護学実習（産業）	10月末日	13/15人	86.7
	看護管理実習	8 月末日	67/107人	62.6
7 期生	基礎看護学実習	12月末日	112/118人	94.9
	成人老年ベーシック実習	8 月末日	76/113人	67.3
8 期生	基礎看護学実習	12月末日	98/110人	89.1
9 期生	早期体験実習	9 月末日	75/116人	64.7

3．分析の簡略化ならびに、科目責任者からの希望による後期からの変更点

前期終了科目の分析は科目責任者の責任で行うよう依頼し、教員によるリフレクションの提出〆切日を10月末日に設定したが、提出された科目は少なく、11月末日まで延期せざるを得なかった。提出が遅れた理由として、入力データに大文字や小文字、記号などが混在しており、分析の際にデータのクリーニングを要したこと、分析そのものも単純集計から行う必要あったことなどにより、分析に多くの時間を要したことが挙げられた。そのため、学部教員の合意を得て、後期開講からの実習については、学生の回答方法を回答選択肢の番号を手入力する仕様から、数字を選択する仕様へ変更し、S*mapのアンケート機能

を使って自動集計できるように修正した。

また、小児看護学実習の科目責任者より、病院と幼稚園・保育園の両方があって小児看護学実習として成り立っているため、７期生以降の評価は、小児看護学実習として一本化し評価したいと申し出があり、修正した。その他の実習については変更希望がなかった。

４．教員によるリフレクションの公開

全学の授業評価のリフレクションと同様の手続きで、学生の実習評価の結果を受けた教員によるリフレクションを学生に公開した。具体的な手続きは次のようである。

委員会担当者が、学生の評価をＵＳＢメモリに保存し科目責任者へ渡す→科目責任者は必要な分析を行う→科目責任者はS*mapのアンケート回答欄にリフレクションを記載して委員会へ提出→委員会の担当者がリフレクション内容をＰＤＦに変換し教務課へ提出→教務課が看護学部教務課キャビネットへリフレクションを掲載→委員会担当者が該当学生へ公開の案内をジャーナルで流す→学生がリフレクションを閲覧

前述したように、前期に履修が終了した科目については、科目責任者による分析に時間を要したため、リフレクションの公開が遅れた。後期開講で履修が終了した実習科目については、S*mapのアンケート機能の自動集計によりリフレクションの記載がスムーズであった。その結果、前期後期のすべての科目のリフレクションが公開できたのは、２月であった。

リフレクションの内容は、学生による実習評価の結果をグラフで示すかどうかも含め、各科目責任者に任されている。全学で実施されているリフレクションの公開時には、評価結果のグラフをリフレクションと同時に閲覧できるよう工夫されており、理解しやすい。今後、学生の閲覧状況とともに、理解しやすいリフレクションの在り方を検討していく必要がある。

５．次年度の課題

回答率を上げる工夫や理解しやすいリフレクションの公開方法について検討する。また、看護学部の自己点検・評価として、教育活動の活性化・質的向上に継続的に寄与できるよう、定着のための方法を検討する。

４　大学院ＦＤ活動報告

４－１．大学院ＦＤ委員会活動記録
４－２．大学院授業アンケート

4－1　大学院ＦＤ委員会活動記録

（第１回） 平成30年5月21日（月） 11：00～11：45	１.報告 （１）平成29年度の活動状況について （２）平成29年度研究倫理e-learningの受講状況について （３）その他 ２.議題 （１）平成30年度大学院FD委員会活動計画に関する件 （２）平成30年度研究倫理e-learningの受講推奨に関する件 （３）その他
（第２回） 平成30年7月2日（月） 11：00～11：30	１.報告 （１）平成30年度研究倫理e-learningの受講について （２）その他 ２.議題 （１）平成30年度大学院授業アンケートの実施に関する件 （２）その他
（第３回） 平成30年11月26日（月） 10：45～11：05	１.報告 （１）平成30年度前期大学院授業アンケートの実施結果について （２）その他 ２.議題 （１）平成30年度後期大学院授業アンケートの実施に関する件 （２）その他
（第４回） 平成31年3月11日（月） 11：00～11：30	１.報告 （１）2018年度後期大学院授業アンケートの実施結果について （２）2018年度大学院授業アンケート検証結果について （３）その他 ２.議題 （１）2018度FD活動報告書に関する件 （２）2018年度大学院FD活動計画検証に関する件 （３）その他

4－2　大学院授業アンケート

1．実施概要

・実施期間

前期：平成30年７月11日（水）～７月31日（火）

後期：平成31年１月７日（月）～１月21日（月）

・実施方法：必要部数を教務課から研究科長へ送り、各研究科にて適当な方法で研究生全員に配布する。回収は返信用封筒による返送または教務課、研究科事務室、日進キャンパス事務課への提出とする。

2．実施状況

【前期】

研究科	前期在学数	回答数	回答率
生活科学研究科	13	8	61.5%
人間関係学研究科	21	7	33.3%
現代マネジメント研究科	2	2	100.0%
教育学研究科	1	1	100.0%
計	37	18	48.6%

【後期】

研究科	対象者数	回答数	回答率
生活科学研究科	11	9	81.8%
人間関係学研究科	21	6	28.6%
現代マネジメント研究科	2	0	0%
教育学研究科	1	1	100.0%
計	35	16	45.7%

平成30年度　大学院授業アンケート結果について（生活科学研究科）

概要：

本年度も、生活科学研究科に在籍する大学院生を対象に、前期・後期の 2 回授業アンケートを実施した。方法は、教務課から研究科長へアンケート用紙を送り、研究科にて研究生に配布する記述回答方式（提出は教務課もしくは各研究科事務室）により行った。アンケート回収率は、人間生活科学専攻（博士後期課程）が100％（前期･後期）、食品栄養科学専攻（修士課程）が62.5％（前期）、75.0％（後期）、生活環境学専攻（修士課程）が33.3％（前期）、100％（後期）であった。

アンケートの設問内容は、以下の 4 項目である。

設問1）大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点など
設問2）大学院の授業科目及び研究指導科目の改善すべき点
設問3）教室設備、研究設備、授業環境などについて気づいた点
設問4）その他、気づいた点

アンケート結果の確認と検証：

研究科長、専攻世話人および大学院FD委員でアンケートの結果を確認した。大学院の授業科目に関わる設問項目については、全員から良好な回答を得た。一方、設備･環境面については、「パソコンが古くて驚いた」、「まともに使えるパソコンがほとんどない」、「恒温恒湿室も環境試験室もないのは本当に残念」との意見など、研究機器に関する要望があった。今後、大学院生の学習や研究が円滑に遂行できるよう、以下のとおり改善策を検討した。

1）研究機材について（食品栄養科学専攻、生活環境学専攻、人間生活科学専攻）

実験装置やコンピュータなどの研究機器は、大学院生にとって研究遂行のための必須道具であり、その整備は重要である。近年、本研究科における大学院生が少数であるため、研究機器の更新が遅れているのが現状である。

今回のアンケート結果から、研究機器に不満を感じている大学院生がいることが分かった。今後は、新規事業要求の機会などを利用し、積極的に研究機器の更新を申請し、大学院生の研究の支障とならないよう考慮していく。

2）その他

回答率を向上させるため、周知の徹底を図る必要がある。

平成30年度　大学院授業アンケート結果について（人間関係学研究科）

平成30年度に実施された大学院授業アンケート結果の確認・検証は、本研究科ではカリキュラム体系の異なる 3 つの領域ごとになされた。今年度は 3 領域とも在学生がおり、いずれも回答を得たことから、先ず領域ごとの確認・検証結果を報告し、最後に研究科の視点で総括する。

【臨床心理学領域】

改善すべき点を指摘された授業 3 つのうち、 2 つは非常勤講師によるものであった。

「臨床心理査定演習Ｉ」は専任教員だが、検査の練習時間が不足しているという指摘については、多くの検査を習得させるために時間がタイトであり、授業時間外に検査用具を貸し出して自由に練習してもらえることを、学生に周知するという対応をとることにする。

「臨床心理査定演習ＩＩ」が「慣れるまでつらかった」という指摘に対しては、担当者が急に休職されたため急きょ非常勤に依頼したもので、土曜の隔週しか来れない現場の先生であったので、時間的にも難しい状況があった。この先生による担当は元来の担当者の復職に伴いなくなる予定である。

「犯罪心理学特講」も遠方からお越しの非常勤の先生で、「すぐ帰られて、質問する時間がなかった」という指摘については、帰る時間が迫っていることもあり、質問に答える時間が十分にとれなかったものと思われる。この点については当該の先生に要望を伝えることとする。

臨床心理相談室における託児の負担については、託児も学内実習の一環であり、公認心理師志望の学生にとっては実習時間としてカウントされるものであることを、周知して対応することとする。

【社会学領域】

授業全般について、概論に近い内容が多く、もう少し発展的な内容や少人数を活かした授業をしてほしいという要望があった（前期）ため、要望を勘案しながら授業を実施する。

「福祉社会論特講」の授業について「板書が見にくすぎる。配られたプリントもわかりにくい」との指摘があったため、担当者が改善を図ることにする。

また夜間授業で使用している星が丘のサテライト教室について、 2 名の回答者から教室の寒さが訴えられたため、教室のある現代マネジメント学部に対し、エアコン設定・機能の状況確認、学習環境の改善を要望する。

【教育学領域】

「科目で興味深かった点」として挙げられていた内容をもとに、授業の有効な進め方等について領域の教員で検討を行った（問題点を指摘された授業はなかった）。

在学生の少ない教育学領域では通常は受講生 1 名の科目が多いが、今回は他領域の学生も受講したことで 4 名という複数での授業を行うことができた科目があった。それにより、文献の輪読、発表とそれに基づく学生間での討論をいう形で授業を進めることができ、授業が活性化した。また、学生間での問題の共有がスムースに行われ、互いに刺激しあうことで活発なディスカッションが展開した。

受講生が複数の場合、学部からの現役進学生だけではなく、科目等履修生として社会経験を積んだ学生がともに受講することで授業が深化した例もあった。討論の際、社会経験（就業経験）に基づいた発言が討論を深め、授業内容を充実させていった。社会人入学生と現役進学生とがともに学び会える環境を作ることも重要な課題であることに気づかされた。

その際、研究科に「聴講生制度」がないことが話題となった。社会人の場合、当該分野の最新の知見を深めたり、具体的な問題解決につながったりと、単位取得とは無関係に同じ科目を複数回受講することを望む場合もある。「科目等履修生」では授業料が高額であることに加え、一度単位を取得した場合、同一科目名の授業を再度履修することができなくなる。そのため、新たに研究科にも聴講生制度を設けることが求めら

れている。

本領域で往々にして生じる「受講生が 1 名」という授業では、どうしても読み込める論文の数が少なくなる傾向があるが、今年度の場合、受講生の意欲や基礎学力の高さなどの要因により、充実した論文講読が可能であった。

英語の文献講読を行った授業では、英文和訳の能力が非常につたない学生であっても、教員が根気よく指導していくことで学習意欲が向上した例が紹介され、授業に真摯に取り組む重要さを改めて認識した。

以上 3 領域の検証結果を総合すると、個別の授業について学生から指摘された問題点については、それぞれ個別に対応して解決できる内容である。

教育学領域では記述のあった肯定点について確認がなされ、教育効果を今以上に高める議論がなされたことも意味がある。その中で、他領域や社会人など背景の異なる学生と授業を供にすることの効果が確認された。また同一科目を複数回受講したいという要望があることが挙げられ、聴講生制度を設けることが提案されたため、研究科レベルで議論することにする。

設備に関しても要望が出され、院生自習室の「空気の入れ替えができるといい」という要望に関して、アンケート実施後に院生にインフルエンザ発症者が出たこともあり、急きょ温湿度計と空気清浄機を 2 台設置した（事務側の迅速な対応にも感謝したい）。

今回、アンケートの回収率が特に臨床心理学領域において低かった（記述式のアンケートは元来回答率が低いのは致し方ないが）。特に後期においては、アンケートの実施期間（1 月）が修論の追い込み時期と重なることが教員側から指摘され、時期を前倒しして12月に実施してもよいのではないかとの提案があった。マークシート中心の学部の授業アンケートと異なり、大学院固有の実施形態と事情を考慮する必要がある。

平成30年度　大学院授業アンケート結果について（現代マネジメント研究科）

設問 1 について

研究分野に関連した授業、および社会人院生にとって業務に関連した科目などバランスがとれたカリキュラムが必要であると思われる。

設問 2 について

講義内容、配布物、板書など受講する学生の立場でのレベル維持、向上が望まれる。

設問 3 について

安全性の確保は当然ながら、教育設備面の定期的なチェック体制についても検討すべきと思われる。

総評

本研究科には 2 名の院生が在籍しているが、今回、後期の授業アンケートは提出されていない。今後も院生アンケートの実施によって院生のニーズを的確に把握し、大学側は可能なシーズとして質の高い大学院教育を提供しなければならない。

以上

平成30年度　大学院授業アンケート結果について（教育学研究科）

教育学研究科においては在学者１名の大学院生から前期/後期授業アンケートの回答があり、教務課によってその結果がまとめられた。この結果に基づき、本研究科においては、平成31年２月25日に研究科長および大学院FD委員と院生にて、座談会形式の確認、検証、意見交換を行った。話し合いの内容は以下のとおりである。

１・２　大学院の授業科目及び指導科目について

「生徒指導特論」「教育心理学特論」「算数科指導法演習」において、特によい機会、経験、研究の参考になったとのことであった。他の科目においても特に問題は無いとのことであった。

３　教室設備、研究機器、授業環境においての要望

「授業があるときに、空き教室だと思われて教室に学部生がいて入りづらい」という意見に対しては、学部生の待機場所の不足は学部全体の問題であるが早急に対応できる案件ではないため、授業であることを在室者に宣言して移動してもらうほか方法が無いことを院生本人にもお願いした。

前期アンケートにて、夏場の食中毒予防のために冷蔵庫の設置希望があり、またその後清掃用の掃除機および電子レンジの設置希望がなされていた。研究科としてこの要望を受け入れることとし、購入をした。座談会後に院生控室における冷蔵庫と電子レンジの設置完了の確認をした。掃除機は本年度中の設置予定である。

４　その他（アンケートへの記述はなし）

現在、実際に本大学院で出会える院生が他にいないが、次年度は院生が増える予定であることから、さまざまな情報や知識の共有に院生が期待を持っていること、実践的な小学校での指導も並行して行っていること等の状況を聞き、現在の院生生活に問題はないことを確認し、閉会した。

以上、今回アンケート回答者が１名であり、回答者が特定されるため、あえて本人を交えて座談会形式でアンケートに基づく聞き取りを実施した。アンケートに書かれた要望に対しては対応済みであり、よりよい環境で次年度も研究を進めてもらえることを期待したい。

以上

5　研究科FD活動報告

５－１．生活科学研究科
５－２．人間関係学研究科
５－３．現代マネジメント研究科
５－４．教育学研究科

5－1　生活科学研究科

清水　秀丸

生活科学研究科は、中部地方初の生活科学系大学院を基礎として、衣・食・住に関わる学問の発展に寄与できる人材育成を目標としており、食品栄養科学専攻と生活環境学専攻の 2 専攻によって構成されている。本研究科のFD委員会は、平成24年に発足され以来、大学院の授業内容や教育方法を改善し向上させるための活動を続けてきた。本年度のFD委員会は、村上心研究科長（兼：生活環境学専攻専攻世話人）、本山昇食品栄養科学世話人、清水秀丸選出委員の 3 名で構成され、以下の活動を行った。

1．研究成果発表会の実施

本年度も両研究科において中間発表会および修士論文発表会を開催した。個別の指導教員のみならず、他の教員からも様々な意見や助言をもらうことにより、大学院生の研究活動がさらに向上すると思われ、とても有益な会となった。

（1）大学院修士中間発表会（食品栄養科学専攻）　平成30年 9 月11日（火）

・林実咲「豆味噌のDipeptidyl peptidase-Ⅳ阻害作用および活性因子の分離と同定」
・廣瀬愛「生体電気インピーダンス法を用いた女子大生の体組成の季節変動に関する研究」
・森本理紗「消化器疾患患者におけるサルコペニア早期発見ツールとしての指輪っかテストの有用性」

（2）大学院修士中間発表会（生活環境学専攻）　平成30年 9 月11日（火）

・田﨑琴絵「中学校家庭科における制服を利用した服育」

（3）大学院修士論文発表会（食品栄養科学専攻）　平成31年 2 月19日（火）

・林実咲「豆味噌のDipeptidyl peptidase-Ⅳ阻害作用および活性因子の分離と同定」
・廣瀬愛「生体電気インピーダンス法を用いた女子大生の体組成の季節変動に関する研究」
・森本理紗「消化器疾患患者におけるサルコペニア早期発見ツールとしての指輪っかテストの有用性」

（4）大学院修士論文公聴会（生活環境学専攻）　平成31年 2 月19日（火）

・田﨑琴絵「中学校家庭科における制服を利用した服育」

2．授業アンケートの実施

本年度も、生活科学研究科に在籍する大学院生を対象に、前期・後期の 2 回授業アンケートを実施した。方法は、教務課から研究科長へアンケート用紙を送り、研究科にて研究生に配布する記述回答方式（提出は教務課もしくは各研究科事務室）により行った。アンケート回収率は、人間生活科学専攻（博士後期課程）が100％（前期･後期）、食品栄養科学専攻（修士課程）が62.5％（前期）、75.0％（後期）、生活環境学専攻（修士課程）が33.3％（前期）、100％（後期）であった。

アンケートの設問内容は、以下の 4 項目である。

設問 1）大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点など
設問 2）大学院の授業科目及び研究指導科目の改善すべき点
設問 3）教室設備、研究設備、授業環境などについて気づいた点

設問４）その他、気づいた点

アンケート結果の確認と検証

研究科長、専攻世話人および大学院FD委員でアンケートの結果を確認した。大学院の授業科目に関わる設問項目については、全員から良好な回答を得た。一方、設備・環境面については、「パソコンが古くて驚いた」、「まともに使えるパソコンがほとんどない」、「恒温恒湿室も環境試験室もないのは本当に残念」との意見など、研究機器に関する要望があった。今後、大学院生の学習や研究が円滑に遂行できるよう、以下のとおり改善策を検討した。

（１）研究機材について（食品栄養科学専攻、生活環境学専攻、人間生活科学専攻）

実験装置やコンピュータなどの研究機器は、大学院生にとって研究遂行のための必須道具であり、その整備は重要である。近年、本研究科における大学院生が少数であるため、研究機器の更新が遅れているのが現状である。

今回のアンケート結果から、研究機器に不満を感じている大学院生がいることが分かった。今後は、新規事業要求の機会などを利用し、積極的に研究機器の更新を申請し、大学院生の研究の支障とならないよう考慮していく。

（２）その他

回答率を向上させるため、周知の徹底を図る必要がある。

5－2　人間関係学研究科

人間関係学研究科の今年度のFD活動を各領域ごとに報告する。

1．臨床心理学領域

（1）研究教育活動

①心理学実験のTA（前後期）

学部２年生を対象とした心理学実験のTAとして、大学院生７名（M１）が１年間にわたり実験実習をサポートし、心理学研究法の実践的サポート、統計解析、レポート作成の相談にあたった。

②自主課題発表会（平成31年１月10日、17日）

心理学実験実習の成果を発表する自主課題発表会において、大学院生（M１）６名が会場の司会（座長）として運営に携わった。

③修士論文中間発表会（平成30年７月27日）

７月27日には、１月に修士論文を提出する予定であった11名の大学院生（M２）が３グループに分かれてそれぞれ発表した。これは毎年実施し、原則として全教員、大学院生（M１、２）が参加している。大学院生は指導教員による指導を超えて、他の教員や大学院生からさまざまな助言指導を得ることにより、より広い観点から研究にアプローチする力が涵養される。

④臨床心理相談室紀要『椙山臨床心理研究』の発行

教員４名が研究論文を執筆し、大学院生（M２）11名が事例研究を執筆した（平成31年３月12日発行）。大学院生の事例研究については、原則として外部の臨床心理士や精神科医からコメントをいただき、事例の理解や自身の臨床実践上の課題などを振り返ることにより、その後の臨床実践や研究に示唆を得る好機となっている。

⑤卒論発表会（平成31年２月１日）

学部４年生全員が卒業論文の成果を発表する卒論発表会において、大学院生（M１）７名が会場の司会（座長）として運営に携わった。

⑥オープンキャンパス

４回の学科展示企画で、院生16名が分担して、心理検査、芸術療法、実験デモを実施した際の担当者あるいはサポート役になった。

⑦臨床発達心理士指定科目取得講習会

平成30年５月18日、19日に本学星が丘キャンパス現代マネジメント学部棟で開催された臨床発達心理士認定運営機構主催の2018年度第１回指定科目取得講習会にて教員１名とM１が２名、M２が２名、修了生１名が運営スタッフとして関わった。

⑧東海アセスメント研究会（平成30年４月22日、７月22日、平成30年10月21日）

人間関係学部棟にて教員２名、他大学教員、修了生（延べ５名）、大学院生（延べ４名）を含む臨床心理士、学校教諭、臨床発達心理士などが参加した。知能検査や発達検査を中心としたアセスメントにより、幼児、児童生徒をどのように理解し支援するかについて検討を行った。

（２）臨床実践

①椙山女学園中学・高校におけるスクールボランティア（生徒に対する相談援助活動）

大学院生（M１、２）が自発的に参加し、スクールカウンセリングを体得する機会となっている。

②臨床心理相談室特別講演会（平成30年12月１日）

臨床心理相談室の主催で一般の方々を対象に無料で開催しており、今年度は福井県立大学教授の池田英

二先生を講師にお迎えし、「青少年のインターネット依存」というテーマでご講演いただき約100名の方にご参加いただいた。臨床心理相談室では参加可能な全相談員・実習員（非常勤相談員・ケースを担当している大学院修了生・大学院生）が一同に会し運営のサポートにあたった。

③面接の個別指導

臨床心理士資格試験の一次試験に合格した全員に対して全教員が分担して、面接に対する個別指導を行った。

④臨床心理相談室ケース報告会（平成31年 3 月 2 日）

臨床心理相談室では参加可能な全相談員・実習員（非常勤相談員・ケースを担当している大学院修了生・大学院生）が一同に会し、年 1 回のスタッフ会議を行った。大学院生・修了生には、組織における臨床相談上の実践的な課題などを検討する好機となり、非常勤相談員には相談室運営上の課題などの共有の場となった。

⑤日進市教育委員会との連携事業

・発達障害保護者相談会：日進市内の小中学生の保護者を対象として子どもの発達障害に関する相談会を開催した（平成30年 9 月13・14日の 2 日間）。教員 6 名が保護者18名の相談を受けた。

・小中学校への巡回指導：教員 6 名が市内の13小中学校に、前後期を通じ 2 回出向いて巡回指導を行った（平成30年 6 月～平成31年 3 月）。

⑥東郷町立小学校でのボランティア活動（有償）

M 2 生が 2 名、東郷町立小学校に行き、個別支援を必要とする児童のサポートを行った。

2．社会学領域

社会学領域においてはこれまで、院生の自主的研究活動および指導教員の集団的研究指導のための組織として、社会学研究会を設立し、組織的活動を続けてきている。組織の運営は基本的に院生が担当するが、領域代表や他の教員が助言等によってサポートしている。メンバーシップは、領域所属の院生･教員、他領域･研究科の院生・教員、課程を修了したOGであり、研究会はオープンな研究および指導活動の場として運営されている。研究会の意義としては、研究能力の向上を目指す院生たちにとっては相互啓発や研鑽の場になったり、教員の多様な視点からの指導を受けられたりすること、教員にとっては教員間で指導方法等について学びあえること、などがあげられる。本年度の研究会は 2 回、2018年 7 月14日、12月15日に実施された。

また、毎年のフォーマルな活動として、領域全体で院生の修論作成の進捗状況を確認し集団的に指導するために、領域所属教員と院生全員が参加する修士論文中間報告会を実施している。本年度は2018年10月 6 日の午後（13:20～14:20：報告・質疑応答各30分）に行った。

FD活動のひとつとして実施している授業等についての院生の意見聴取および教員を含めての話し合いを、修士論文中間報告会の後に行った。院生と教員の話し合いを実施したことで、授業についてだけでなく、研究環境についての具体的な要望を聴取することができた。

領域所属教員による授業改善等についての意見交換は、2019年 2 月13日の領域会議時に、約 1 時間程度おこなった。意見としては、「受講生の数が少ないため、受講生に合わせた授業を実施することになり、討論などの展開が難しい」「カリキュラムのあり方や科目名の変更等を検討する必要がある」「修士論文の閲覧等が公式に可能になることを踏まえ、社会調査等の結果を用いた内容の場合、研究倫理指導をより徹底する必要がある（たとえば、事例研究Ⅱのコマを利用するなど、具体的方法を検討すべきである）」などが出された。これら意見交換によって、教員間で授業改善の検討課題を共有できた。

3．教育学領域

授業改善等に関する意見交換を2019年 2 月10日に 1 時間程度行った。

①受講学生数の課題

本研究科の中でも在学生の少ない教育学領域では、受講生 1 名という授業科目が多い。この際の授業

の進め方が例年のように教員間で議論されているが、なかなか根本的な解決策が見出せない。そんな中、今回は他領域の学生も受講したことで 4 名という複数での授業を行うことができた科目があり、これにより文献の輪読、発表、学生間の討論などいつも以上に授業が活性化したという報告があった。互いに刺激しあうことで活発なディスカッションが展開し、 1 冊の文献を最後まで読み通すこともでき、有意義な授業が進められた。受講生が複数であることが望ましいことは重々承知していたが、改めて受講生 1 名という授業のデメリットが浮き彫りにされた。もちろん、少人数であることにはメリットもあるが、なかなか決定的な解決策が見出せないのが実情である。

学生への負担を考えて発表やレジュメの作成等に配慮する一方で、受講生が 1 名である点を活かして専門的な文献講読と並行して専門的英文和訳などの基礎技能向上のための指導も丁寧に行うなど、少人数授業を充実させる授業方法についても議論が行われた。

②社会人学生の重要性

受講生が複数の場合、社会経験を積んだいわゆる社会人学生と現役進学生とが学びあうことの重要性も指摘された。討論の際、社会経験（就業経験）に基づいた発言が討論を深め、授業内容を充実させたとして、就業している学生がともに受講することで授業が深化した事例が報告された。社会人学生と現役学生とがともに学びあえる環境を作ることも重要な課題であることが共通認識された。

将来的な領域のあり方についても2018年10月 3 日に 1 時間程度時間を設け、意見交換を行った。その中で、現在の学部の 2 学科体制に沿って教育学領域と社会学領域を「人間関係学領域」に統合する案などについて話し合われた。家族・子育て・ライフキャリア・ジェンダーなどに関する科目で構成されるライフスタイル系のコースと、福祉・地域・若者文化・現代文化などの科目で構成される現代社会系のコースとを設ける案なども意見として出され、今後も継続的に検討していくことが確認された。

5－3　現代マネジメント研究科

1．大学院現代マネジメント研究科の概要

平成26年４月、大学院現代マネジメント研究科（修士課程、定員 5 名）が開設され、本年度が 5 年目となる。今年度は、修士課程 1 年生の 2 名が在籍している。

本研究科では複雑化する経済社会において既存のモノや仕組みに“イノベーションマネジメント能力”を活かすことでより高度な付加価値を創造するための人材の育成を目指して教育・研究を行っている。

2．ＦＤ活動

本研究科では個別の指導教員による指導だけでなく、下記のような修士論文の作成に向けた各段階での発表会を開催して各大学院生の研究の進捗状況を教員全員が把握し、様々な専門分野の視点からの複合的な指導を行っている。

1）第 1 回修士論文構想の合同発表会　平成30年 7 月17日（火）

伊佐地　由梨（修士課程 1 年）

太田　真依子（修士課程 1 年）

2）第 2 回修士論文構想の合同発表会　平成30年12月20日（木）

伊佐地　由梨（修士課程 1 年）

高齢期における「自己能力開発型余暇」とライフマネジメント　－フラを事例として－

長期化する高齢期において、肉体的・感性的・理性的能力を高めることのできる「自己能力開発型余暇」が高齢者の生活の質を豊かにすることを明らかにする。その事例としてフラを取り上げ、生活の中で取り入れる方法を検討する。

太田　真依子（修士課程 1 年）

企業におけるサーバントリーダーシップの有効性に関する研究

－次世代女性リーダー育成のための「サーバントリーダーシップ教育プログラム」の提案－

企業経営を取り巻く環境の変化とともに、職場における多様性・複雑性が高まっている中で、ミドルマネジャーに求められている役割がこれまでと大きく異なってきている。組織の諸課題を解決するためのミドルマネジャーにおけるサーバントリーダーシップの有効性を明らかにする。女性管理職推進の一環として女性のミドルマネジャーのサーバントリーダーシップの有効性を明らかにする。また、そのための育成プログラムを提案する。

3．今後の課題

・学内他 3 研究科との連携による教育・研究の質的な向上。

・大学院生指導における主研究指導教員・副研究指導教員を中心とした指導体制の強化と研究支援の仕組み作り。

・大学院生による学会発表・論文発表の促進。

5－4　教育学研究科

教育学研究科　室　雅子

平成30年度は教育学研究科において、学部と共催で４回の研修会を実施し、１回の院生との意見交換会を実施した。

平成30年度活動報告

1．FD講演会の実施２回（学部FD委員会との共催）
2．FD研修会の実施２回（学部FD委員会との共催）
3．授業アンケート実施状況および総合的充実度
4．授業アンケートを基にした大学院生との意見交換会

1．講演会

（1）第１回　FD講演会の実施（学部FD委員会と共同開催）

日　時：平成30年９月11日（火）教授会終了後、約60分
場　所：教育学部会議室
テーマ：「現代の学校教育改革の動向」
講演者：伊藤博美（教育学部教授）
対　象：教育学部教員
概　要：2015年からOECDが取り組んできたEducation 2030プロジェクトについて、現代の生徒が成長し、世界に切り拓いていくためには、どのような知識やスキル、態度及び評価が必要か、学校や授業の仕組みが、これらの知識やスキル、態度及び評価を効果的に育成していくことができるようにするためにはどのようにしたらよいかについてご講演いただきディスカッションを行った。

（2）第２回椙山女学園大学教育学部・同研究科FD講演会

＜第一会場＞
日　時：平成31年１月26日（土）16:00－17:00
場　所：教育学部棟B 307教室
テーマ：「これからの幼児教育」
講演者：山中文附属幼稚園園長・石橋尚子前附属幼稚園園長
対　象：幼児教育に関心のある本学卒業予定者および在学生、教員

＜第二会場＞
日　時：平成31年１月26日（土）16:00－17:00
場　所：教育学部棟B308教室
テーマ：「これからの児童教育」
講演者：森和久附属小学校校長・宇土泰寛元附属小学校校長
対　象：初等教育に関心のある本学卒業予定者（４年生）および在学生、教員

２．研修会

（１）第１回椙山女学園大学教育学部・同研究科FD研修会

日　時：平成30年10月２日（火）15：00－16：00
場　所：教育学部棟C310教室
テーマ：「入学生の傾向から教育学部の将来を考える」
講演者：黒田紀夫（ベネッセ）
対　象：教育学部教員

（２）第２回椙山女学園大学教育学部・同研究科FD研修会

日　時：平成30年11月13日（火）教授会終了後　20分
場　所：教育学部会議室
テーマ：「シラバスの作成方法についてのＦＤ」
講演者：國井修一（学部ＦＤ委員）
対　象：教育学部教員

３．　授業アンケート実施状況および総合的充実度

現在１名在学１名休学につき、授業アンケートは１名の回答となった。前期および後期のアンケート結果が回収され、下記の内容が回答された。

大学院の授業科目及び指導科目については、履修した科目において特によい機会、経験、研究の参考になり、他科目においても特に問題は無かった。 教室設備、研究機器、授業環境については、授業時に教室に学部生がいることについて指摘があったが、授業であることを在室者に宣言して移動してもらうほか方法が無いため、特別な解決は行わないこととなった。一方、院生室への冷蔵庫、掃除機、電子レンジの設置希望は受け入れ、設置した。

４．授業アンケートを基にした大学院生との意見交換会

日　時：平成31年２月25日　15:10－15:40
出席者：研究科長、大学院FD委員、院生１名

３のアンケート結果を基に、現在の院生生活に問題はないことを確認し、要望のあった事項は改善されたことを回答学生にも伝えた。

6　FD委員会名簿

6　FD委員会名簿

平成30年度全学FD委員会委員

所　　属	職位	氏名	選出区分
学長補佐	教授	田中　節雄	学長補佐
生活科学部	講師	清水　秀丸	学部FD委員
国際コミュニケーション学部	教授	横家　純一	学部FD委員
学長指名	教授	小澤　英二	学長指名
人間関係学部	教授	中西　由里	学部FD委員
文化情報学部	准教授	見田　隆鑑	学部FD委員
現代マネジメント学部	准教授	吉本　明宣	学部FD委員
教育学部	教授	國井　修一	学部FD委員
看護学部	教授	北川　かほる	学部FD委員

平成30年度大学院FD委員会委員

所　　属	職位	氏名	選出区分
学長補佐	教授	田中　節雄	学長補佐
生活科学研究科	講師	清水　秀丸	研究科FD委員
人間関係学研究科	教授	山口　雅史	研究科FD委員
現代マネジメント研究科	准教授	石井　圭介	研究科FD委員
教育学研究科	教授	室　雅子	研究科FD委員

椙山女学園大学・大学院FD活動報告書（平成30年度）

椙山女学園大学・大学院ファカルティ・ディベロップメント
第 6 号（通巻　第19号）

令和元年 7 月発行

編　集　椙山女学園大学大学院FD委員会・全学FD委員会
（平成30年度・31年度委員長　田　中　節　雄）
発　行　椙山女学園大学
〒464-8662　名古屋市千種区星が丘元町17-3
TEL〈052〉781-1186（代）